

特62-582



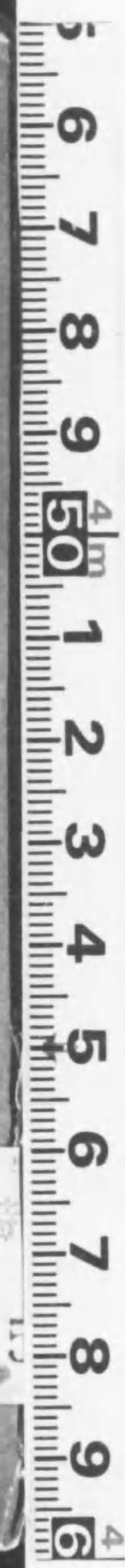
1200800265107

錦囊 作文

美文の資料



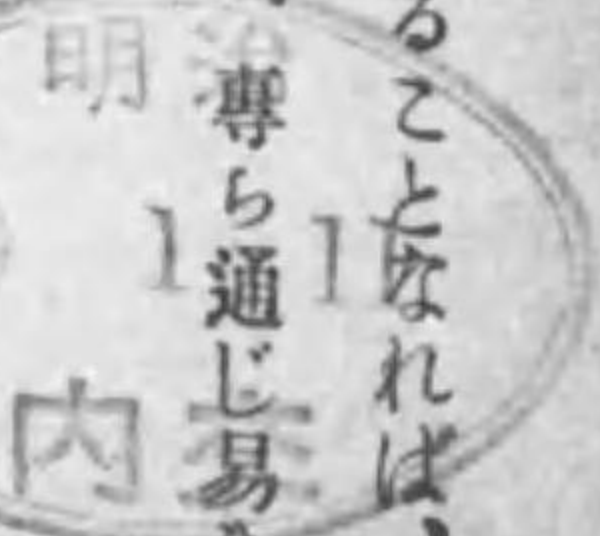
始



例言

一 此の書は、作文初學びする人達に勸めんとて、物せることなれば、
 載する所のものは、成るべく高遠に涉ることを避けて、専ら通じ易き
 美辭の材料たるべきものを輯めたり

二 文章は、いかに意のよく通ずるも、これが裝飾なきときは、裸體の
 人を見るがごとく、大に忌まはしきことなり。されば、裝飾は、
 人のよき衣着たらんやうのものなるをもて、其の文辭の修飾は、等閑
 に附すべからざるものなり。此の書は、是等修飾の一助にもならんか
 と思はるゝものを掲げたれば、其の類によりて索めらるべし。



三 斯くのことくいふときは、修飾せざるものは、文章として見るべからず、又、天地の間に於ける森羅萬象を文につゞるに、などか、此の小冊子によるべき、と非難せられんも測られず。されど、此の書は前にも述ぶるがごとく、初學びする人に、修辭の手引をなさんとて、公にしたるものなれば、見る人、其の心してよ。

四 此の書は、幾部門にも分ちぬれども、尙ほ此の外にも、多くの部門あるべし。是等は、更に他日を待ちて、徐々に完璧たらしめんことを期す。

五 上欄に掲ぐるところのものは、作文の上に於いて、要すべきことにも就いて、聊か参考に資せんことを欲して物せるなり。是れ亦僅に其の一例に過ぎず。

六 各部門ごとに、古人の作にかゝれる文章を掲げつるものは、其の部門の或る一項に適して、其の作例を示したるに過ぎず。よくこれを熟讀玩味するときは、得る所少なかるべし。

明治三十八年十一月

(一) 次 目

目 次

第一編 時今門

○春	一
○春雨	四
○梅花	七
○櫻花	九
○青柳	二
○春曉	四
△江上の霞	六
△花月の遊	七
△春のあそび	四
○夏	五

○新緑	九
○瀑布	三〇
○納涼	三三
○海水浴	三五
△杜鵑をさして感	三六
△納涼の記	三七
△漁村	三八
○秋	四三
○秋草	四六
○蟲	四八
○秋月	五〇

(二) 目 次

○紅葉……………五三
 △中野郊行……………五六
 △暮秋……………六〇
 △擣衣の心を……………六三
 △月を観る記……………六三
 ○冬……………六七
 ○雪……………七三
 △一日の澤……………七三
 第二編 天文門……………八九
 ○雲霞……………八九
 ○雨露……………九一
 ○霜雪……………九四
 ○日光……………九六

○月色……………九六
 ○星……………一〇一
 ○雷電……………一〇三
 第三編 地理門……………一〇四
 ○江海……………一〇四
 ○山嶽……………一〇六
 △鸚鵡石の記……………一〇九
 △菅笠日記……………一一一
 △海道の記……………一一五
 ○港灣……………一二三
 ○街衢……………一二四
 ○岬崎……………一二六
 ○波瀾……………一二八

(三) 目 次

○郊野……………一三〇
 第四編 人事門 附天事……………一三三
 ○旅行……………一三三
 ○火災……………一三六
 ○別離……………一三八
 ○窮境……………一三九
 ○哀傷……………一四二
 ○壽賀……………一四五
 ○仁慈……………一四七
 ○變遷……………一四九
 ○水害……………一五一
 ○震災……………一五三
 ○競争……………一五四

○疾病……………一五六
 △芳宜園大人を祭る詞……………一五八
 △學校生徒の卒業を祝ふ……………一六四
 △觀世太夫の話……………一六九
 △無常の歌……………一七〇
 第五編 人倫門……………一七九
 ○臣子……………一七九
 ○父子……………一八二
 ○夫婦……………一八四
 ○兄弟……………一八六
 ○慈孝……………一八八
 ○朋友……………一九一
 △兄弟……………一九四

(五) 次 目

○凱旋	二五五
○哨兵	二五八
○陸戦	二六〇
○海戦	二六三
△安藤聖秀	二六五
△高橋紹運の武勇	三六九
上欄	
○要語異同辨	一
△い	一
△は	二
△に	六
△ほ	八
△へ	二

△と	二
△ぬ	五
△を。お	七
△わ	九
△か	二
△た	四
△そ	七
△つ	九
△な	一
△む	三
△う	三
△の	六
△や	七

(四) 次 目

△父を扶けし幼児	一九五
第六編 性行門	一九六
○愛情	一九六
○廉潔	一九九
○忍耐	二〇一
○謙遜	二〇五
○果斷	二〇八
○剛勇	二一〇
○公平	二一三
○修身	二一六
○德行	二一九
○勉勵	二二一
○克己	二二四

○傲慢	二二六
○驕奢	二二八
○浮薄	二三〇
○追慕	二三四
○仁愛	二三六
△古人の苦學	二三九
△春某の義勇	二四一
△善惡各類ある論	二四四
△讀書の樂	二四五
第七編 兵事門	二四七
○戰闘	二四七
○戰捷	二四九
○兵要	二五二

△ま	五九
△こ	六三
△え。	六七
△あ	六九
△さ	八〇
△き	八三
△ゆ	八四
△め	八八
△み	八九
△し	九三
△も	九六
△せ	一〇一
△す	一〇二

○文辭修飾の例	一〇八
○對句例	一五八
○序詞	一七四
○枕詞	一九四
○座右訓	二〇一

目次終

○要語異同解

△イ
○怒いかる 怒氣の外
にあらはるゝこと
にして最も普通ふつうに
用ひらるゝところ
のものなり。其の
意、極めて廣し。
○憤いきどほ 怒りて、
強く心中におさへ
又、言語げんごと外貌ぐわいぼうと
にあらはるゝもの

作文 錦 美文の資料

蘆の家主人著

第一編 時 令 門

○春

名も知らぬ、草木くさきの花も、いろ／＼に咲さきにほひ、錦
を晒ひすにさも似たり。
稍、春ふかく霞かすみみ渡りて、花はなもしだいに咲さき初はじむる野邊のべ
とはなりにけり。

(二) 美文の資料

なり。
○悲 怒りて、人を怨む情の極めて強きことを云ふ
○忿 心中に怒りて、精神大に暴發し前後左右の辨別なきに至るものなり。
○傷 痛みに感じなやむ心なり。甚だしく悲しむこ

洩りくる影も長閑げく、知るも知らぬも道の邊の、行きかふ袖の花の香に、一しほの春の色ぞ勝りけり。
春の花も匂のどけく、心はと長閑なりき。春の夜の花のかげより明け初めて、東の空に紫の雲の、ほの見ゆるは、實にや得がたき景色とこそ見えけれ。
日にく喧和を催しにける。
百草芳香を呈し、群花先を争ひて開けるは、春に晚れざらんがためのみ。
春風來たりて、好鳥音を弄す。

(三) 時令門

となどに用ふ。
○痛 最も普通
に用ひらるゝものにして、痛みを覺ゆることなり。
○悼 なげかはしきの意なり。
○言 我が心に思へることをば直ちに言葉にあらはすことなり。
○云 多くは過

水は、はや寒からず、煙は、己に暖なり。
毎歳立春の後、七句を経るときは、實に開花の好時期なり。
士女は、花下に群りて、太平を謳歌す。
白雲は、翠松を掠め、彩霞は、綠樹を縫ひ、一帶の素練は、遙に地に横たはりて、蜿蜒たるは、正に一幅の活畫圖に對するの思あるもの、是れ某畫伯の春景をうつしたるものなり。
蕙芳煙霞を積み、野外の春色更に濃なり。

(四) 美文の資料

去の意に用ふるものにて例へば、某は、斯くの如く云はれたりなどの場合に多し
○謂 前の言と殆ど相同じ。
○曰 人の言葉を以て、直ちにうつすときに用ふ。
又、過去のことを取りて、曰とある

(五) 時令門

は其の意を強くせんがためのみ。
○道 我が意中にあることをば、道筋を立て、いひ述ぶることなり。
○詐 虚言を吐きて人を欺くこと、又、言葉の上に於いて、有ることを、無きがのごとく、無きことを、

春雨過ぎたる跡、百草萌え出で、いよ／＼緑を加ふるに至る。

菜花繚亂として、緑色更に深く、鮮麗愈麗を加ふ。朝廓雲を拂ひて、晴霞は、天に亘り、海濱の白砂と其の色を競ふ。

夕陽西に没し、夜色暗澹たりといへども、徐に春色の濃なるを知るに至る。
千紫萬紅、美を争ひ、妍を競ふ。

○春雨

昨夜より降り出でたる春雨の、ゆくりなくも晴れければ、景色や、いと面白し。

春雨の空、名残なく晴れ渡りて、遠近の山々は、なべて青みわたれるに、野邊の草木もはや、我が物顔なり。

木蔭の土は、春雨に潤ひたりければ、少しく黒みたるに、白き花の散りて、さながら鏢鉏の様に見えにき。篠衝くが如くに降りける夜來の春雨も、曉方にいたりて止みけるも、雲の浮あしなほ静ならざりけり。

(六) 美文の資料

有るかのごとくに
欺くことなり。
○偽いつはま まことの
反對はんたいにして、萬事、
我れに都合よき様
につくり欺くと。
○抱いだ 兩手にて
かゝへ持つ意なり。
○懷いた 心に思ひ
こめて居る意なり。
○如何いかに 何に重
き意ありて、どう

いとこまやかに降れる春雨の、いつ晴るゝとも見えざ
りけるは、年々のことゝはいへ、實にや花の障とな
らんかし。

花を催すの雨は、是れ花を落すの雨なりとは、古人
の言ひけんも、實にこそと思はるれ。

一夜風あらししく、雨さゝ打ちまじりければ、こは如
何になるらんと思ひて戸を開け見れば、庭の苔地の
黒みたるが上に、いつ降り積れるにやと怪しまるゝ
ほどに、葩の散敷きて、雪の積れるに異ならざりき。

(七) 時 令 門

なしたらば、宜し
からんかといふ意。
○奈何いかに 如何よ
りも其の意の輕さ
ものなり。奈の一
字にても、むかし
は、同意義に用ひ
られたる例多し。
○若何いかに 是れ亦
如何よりも、其の
意強し。若は、如
に通じて用ひらる。

青柳の糸に玉ぬく露にのみ、霞む朝の雨をしるかな。
春雨の音のしのばれて、獨り閑窓に籠ちこまれる心の
遣る瀬なさは、いどゝ悲しかりけることゝもにぞあ
りける。

○梅花

待ちにまちし初鶯の聲のほのかに聞ゆるにぞ、能く
きかまほしと思ひて竊に忍び寄りぬ。

梅の花を手折れば、ばらくと滴れて、白妙の袖より
袖より降れる春のあわ雪のごとき心地ぞせらるゝ。

(八) 美文の資料

○何如 是は、如の字に重き意を捨てよろしきや、將た宜しからずやとの問にて、其の答は、不可なり。

○息 氣のやすらかに安む意あり。

○休 動作についてやすむことなり。

○慰 息をつが

春は、先づ咲く梅が枝に、木づたふ鶯の法々華經と囀るやさしさ。

古き軒端の梅の花、庇は傾けるも、何となう面白き風情の見ゆるこそ嬉しけれ。

軒より滴れる車の寒さを伴へるは、梅の花の散るを、雪と見せしむるに似たり。

幹は、老骨にして蜿蜒、白苔之れにまとい、蛟龍の淵より出て、將に天上せんとするに鬚鬚たり。

風骨英靈、氷雪に誇る。

(九) 時令門

んとして、小休みをなすことなり。

○至 此處より彼處に行きてつく意なり。

○到 彼處へ行

○抵 至に同し。

○造 次第に進み行くの意なり。

○格 來ることなり。

然れども今

雪か、霞か、花か、煙か、自然の風光は、宛然として圖畫の如し。

南枝盛に蕾を破りければ、はや春風の至れるを知るに足らん。

○櫻花

春の花と云へば、直ちに櫻を思へるこそ、實にや此の花の勝れるなれ。

雲かと見えて八重一重、斯く盛りに咲ける花の色の麗しき。

(〇一) 美文の資料

日には、物に感通するときは、外、多く用ひられざるものなり。
○安 いんあん 心して其の地位に居られぬことなり。
○焉 いんん 正邪の念を含みて言ふ意なり。何といふ理ぞやといふ義あり。
○鳥 いんん 是は、双

山の端に咲ける櫻の、霞につままれて、風に動ける姿のいとほらしくこそあれ。
見渡せば、柳、櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦を飾りけるは、誠に嬉しきことも云ふべきかな。
長堤十里にもあらんづらん、兩側の櫻は、今は、はや咲きも亂れず、散りも初めず、其の風光は、得も言はれまじ。
八重一重、我れを争ひて咲きけるは、春の錦のいと、見榮あるもの哉。

(一) 時令門

方かたの間の懸隔けんかくの、餘り甚だしき故に、これを歎じていふ意なり。
○惡 いんん どうしてといふ意。
△は
○初 はつめ 重おもに、時間の上に於いていふ
○始 はじめ 終結の正反對にして、重に

春來れば咲きにほへる花の下にありて、眺めけるに、降り來たれる春雨にあひぬ。よりて此の下蔭を宿として寝ぬれば、袖に雪の降れる心地ぞせらるる。
満山の櫻雲は、一望際涯なく、人目を悦ばしむるに足る。
白雲煙霞、春風に動けるは、是れ即ち嵐山の櫻花ならんか。
紅雲香靄として、吟情坐に起り、拙句二三、忽ちにして浮ぶ。

(二一) 美文の資料

事の上に就きていふなり。
○首 最も一番にありとの意なり。
○創 事物をば新規になし始むることなり。
○甚 其の用途廣く、其の意義は、外よりも一層際立ちてあることを云ふ

(三一) 時令門

○酷 甚と其の用途を等しくす。
○太 此の上なしとの意なり。
○痛 餘り非常に度を過ぎて我が心に堪へかぬることなり。
○耻 深く心にはち入りて、自ら容態にもあらはるゝとの意なり。

兩崖皆櫻樹にして、囑目盡くるなく、長橋の波に架するが如きあり。
舟を花下に浮べて遊べるは、清閑之れに過ぎるものあらじ。

○青柳

翠柳は、露を帯びて、煙を含み、小川の岸邊に蔓りぬ。
楊柳は、萌え出で風に糸繰らるゝがごとく得る言はれぬ、風情あり。
東風吹きて、柳の緑はいとど、濃になりぬるうれし

さよ。

楊柳は、翠黛の眉を展べて、長堤に斷續たる有様、實に春の景色なり。

風の柳に三日月の左右にみだれて狂へども、もつれもなさぬ風情。

青柳の糸は、櫻に亂れあひて、結ぶ緑の佐保姫の、神の恵や有り難し。

月もかすめる春の夜に、柳の枝の糸くりて、いともなよやかなるは、うれし。

○辱 外聞のあしきことにて、はづかしめと訓ず。
○羞 耻の字よりは其の意、稍輕し。
○慚 外より辱しめらるゝ場合などに用ふるなり。
○愧 慚よりは其の意強し、決心の意を含めり。

○作 慚と稍其の意を同じうす。
○走 或る一點に達せんとして、歩行を速にすることなり。
○奔 或る一點を指さずして、漠然として逃げ行くことなり。
○趨 小足に早く歩むことなり。

花は、咲かずとも、實は、結ばずとも、寂しき風情の喜ばしきものあるは春の萌え出でんとする柳にやあらん。

○春曉

佐保姫の糸よりかくる青柳を、吹きな亂りぞ春の山風。
曉の風に夢おどろき、起きて紙窓を開き見れば、残んの月は、梢にかゝりき。

宿鴉は、啞々として天やうやく曙けなんとするに近し。遠近の山は、春霧につゝまれて、霧の海を見るが如し。

東海の白帆は、曉風を孕んで、輕舸よりも速なるが如し。

遠寺の曉鐘、窓に響き、將に曉ならんを報ずるといへども、春夢濃にして未だ知らず。

春眠曉を覺えずとは、誠に其の然るを知れり。曉風暗香を送り、滴露衣を霑す。

宿靄山河を包み、曙色將に脱せんとす。晨靄未だ去らず、模糊として暗澹たり。

△に
 ○遁 避けかくる、意なり。
 ○逃 遁の字と同じ意義なり。
 ○亡 のがれ去ること。
 ○脱 ぬけ出でて走ること。
 ○俄 間もなくの意なり。然れども、此の間と云ふ

曉霞未だ収まらずして、山野の色を分ちがたき風光は、春に於いて、始めて見る。

○江上の霞

この頃までは、漕ぎ行く舟の、ゆき、さはりし入江の氷も、いつしかなごりなう、解けわたりて、汀の蘆の角ぐみそめたるものどけきに、あなたの岸の柳の、繪に書きたらん様に、打ちかすめるものから、さすがにあるかたきかの春風になびくさまの、ほのくくに見ゆるもをかしく、まして、こゝもとなる海

は、極めて少しの間なり。或る場合に於いては、『急に』といふ所に用ふ。
 ○驟 急にたびく起ること。
 ○遞 あはたぐしきこと、思ひもつかぬこととなり。
 ○卒 忽ちの意を含めり。

士の軒端に、若いぬさまなる梅が枝の、まみひらいたるがなつかしう、袂にほひくるなどりづらしうも、あわれにもいはん方なき心地ぞせらるゝ。

○花月の遊

今日は、いとのだかなり、いでやすみだがはらの花見んと、小舟に乗りて行きたるが、花見んと立ち出づる諸人のさま、げにや、都のみやびをつくせり。さまざまの心々にうちむれて行くに、女房なども、何か口たゝきつゝ心そらにわりくもあり、馬はせて、

○暴 （たけなげ） 最も急劇
猛烈に突き来るが
とき形をあらはす
ことなり。

△ほ

○褒 （ほめ） 人目にた
つ様にして、物品
を興へ、又は言葉
にて、其の功勞を
賞すること。

○譽 （ほめ） 言葉を以
て、人の功勞など

を、しきりと賞揚
する意なり。

○賞 （ほめ） 奨励する
がため、若くは功
勞をほむるがため
に、物品を贈與す
るの意。

○縦 （たて） 自己の心
に欲すること、
自由自在に行ふ意
なり。
○放 （はな） 事物に拘

花をも目に掛けずいとはうそくに行くもあり。やど
となき人にや、人々打ちかこみて、つゝましげに行
く女もあり。あるは木かげにて、はや、ひさごかた
ぶけて、何やらん、やたて出しかいつけ、かうよりし
て花の枝につけてわれは顔なる風情なるものあり。
けふは、げに晴れもはれて、一天に雲なく、富士も
筑波も手にとるばかりに見えたれど、また、それを
ち打ながむる人もなし。まして、かく晴れたる日は、
とみに雨風のなるなど云ふことは、露思ふものもゆ

らじかし。こののどげなる御代の、春の御恵にぞ、
かく心ゆたかに、たのしび遊びて、かへこわする、
ばかりしても、何のわづらひ、うれひもなきに、こ
の花もむかしより、つきぬ御恵ふかき露に生ひそひ
しとやらんも、きけばさ思ふ人もありやなしやと見
れど、王世の民の心とかや。かゝるてる日の恵をば、
思ひもよらず、いつもかく空は、晴るゝものとはか
りも思はぬ輩、多からんなど思ひかへして、よもを
ふと打ち見れば、つくばねのあたりいと細くひらめ

料資の文美 (〇二)

泥でいすることなく、束縛そくばくせられざるをいふ。
○恣しひま 我儘わがまをはたらく意なれども、狡猾かうわつなる意味いみを含めり。
○擅しひま 一人にて事を處理しゆりするがごとく、専らといふに同じ。
○横しひま 善惡ぜんあくの兩

きたる雲こそありけれ。この雲よ、世に云ふ、はやてなどいふものなりけり。餘りに朝より珍らしく晴れたる日なればきて、かねて簑も笠もはなたで居しが、はや櫓をしたて漕ぎかへるを、いかにこの花を見すて、かへるは、かりがねにつらさやならへる。ろの音ばかりまなべよかしなど、口々にわらふを、耳にも入れでとき去りぬ。いつかその雲のひろがりてけるが、かのともがらは、露もしらず、日のかげろふもしらず、けふは、あつきばかりなりとて、は

(一) 門 令 時

意あれども、無理に實行するの意なり
△へ
○諂へちま 或る利益を得んがために、心にもなき追従をいひて、専ら人の氣を歡よろこばしめんとすること。
○諛へちま 諂に同じ
△と

だぬぐもあり、又は衣などぬぎて、はせありくもありぬべし。雨にさきだつ風のひと通り吹落ちたれば、こは花よと思ふものもなく、いさこ吹きたてたれば、たゞおどろきある、がうちに、雨のふりいてたり。初めは、心地よき雨など、いひたらんが、後には、人の聲、雨の音もせず。馬をはせてかへるもあれば、おどろきあはてし、堤よりまろび落つるもあり、女などは、いといたうみぐるしきまで、あわてふためきて、はじめよそほひしをも、みべから夢と思ふ

料資の文美 (二二)

○取 とりて我が物にすることなり。
 ○採 撰びて摘み取ることなり。
 ○把 持つ、握る、つかむ、などの意なりとす。動詞なり。
 ○執 固く手に握りて離さぬこと
 ○操 固くしか

(三二) 門 令 時

と持ちつとけて、如何にするも離さぬこと。
 ○攪 とりあつめること。然れども實際手に取らざるときにも用ふ。
 例へば人心を収攪すといへるが如き即ち是れなり。
 ○共 すべての事物を、人ととも

らんさまなり。まして酒にまひて、ぬるゝもしらずほに笑ひなどするもあれば、おもひ寄ららぬ愚なるが雨かなと、いかりのゝしるもありぬべし。かの舟は、はやく漕ぎゆきぬれど、わがすむ浦は遠ければ、とある橋の下に舟とめて居しが、橋の上など人の走りさはぐは、なるかみのやふに聞えぬ。はや、雨もかぞふるばかりに川のおもに見ゆるころ、夕月のことさらに新しくみがき出でたれば、はや雨のなごりもなし。堤の花いかゞあらんと、ときかへしてみれ

ば、そのころは、はや人もなし。雲のこのまにほのくくと、月の見えたるは、我がためにつくりなしけんと思ふばかりなり。濡れにし人は、ゝかゞしたりけん、この月などは、思ひもよらであらんなど、ひとり思ふも、何となく心ちごりゆきぬ。かぞいろも、われひとり、人にこえて、心地よきと思ふときはといましめたまひたれば、またあやまちやしぬべくと、ねそろしくねばえければ、のみ残したる酒携へて、つひに漕ぎかへりしとよ。

に同じくする意なり。即ち共同のことなり。

○俱 物事ひとつにといふ意なり。

○借 相揃ひて、ひとつにといふ意。

○共 物事を相手にすることなり。

○所 場所又は方角のこと。

○處 在りどこ

○春のあそび

表むきの廣さしきに、酒の宴をひっかせたまふ。その名もかほる花の御所、今年は、常よりあたゝかにて、今をさかりのそのけしき、繪にうつすともうつし得じ。まながら雲かとおやまつばかり、築山はたゞ白妙にて、あるは、泉水にかけをうつして、魚も樹の梢をくぐり、あるは、築牆に咲きこぼれて、ゆきゝの人も雲をふみ、日は、よく晴れし空のけしき、さへづる鳥のこゑくも、心地よげにぞ聞えつる。

ろ、居どころの義に用ふることなり。

○攸 前の所の古字なり。故に其の意味は相同じきなり

△ぬ

○抜 ひきぬくことにて、撰ひ出す意。

○抽 ひき出すこと、又、高さの

○夏

川の流の水さよく、岸には、青草生ひ茂り、漣うかぶるその風情は、外には求めがたからんかし。

涼しき川風吹き來たり、拭ふがごとくに暑さを忘るゝに至らしめぬ。

まことや、金をとかすと云へる、唐詩にも見えつる如く、三伏の暑氣は、身もほとほと堪へがたし。

夏山のけしき、青みわたれる高き峰、大空につらなりて、雲の上に聳えぬ。

とさにも用ふ。
 ○挺 ぬきん出
 ること。
 ○盗 人の物を
 人知れず、窃に取
 ることなり。
 ○竊 人々見て
 居らぬときに、見
 はかりて事を謀り
 行ふをいふ。
 ○偷 人の注目
 せざる間に、掠め

夏は、撫子の濃き薄き、錦をしけるやうになん咲きに
 けり。

この頃は、卯月の夏がすみ。

降りくらす軒の玉水うちたえず、五月雨のいとどもの
 うき。

早苗取るところなればにや、耕し作る人々の忙はしきは、
 實に此の頃なりき。

若葉の梢すゞしく、茂りにしげり行く程に、はや暗く
 なりたらん様なり。

取ることなり。
 △を。お
 ○恐 將來のこ
 とを、きづかひて、
 憂ふることなり。
 ○畏 すべて、
 場合の如何にかゝ
 はらず甚だしくお
 そるゝことをいふ。
 ○懼 物事にさ
 しかりて、おそ
 るゝことなり。

道すがら男女の首の笠きて、田の草とやらん取る様に
 見えにき。

所の中にありて、蒸さるゝが如きものなりとは、この
 頃の暑さをやいふべからん。

吹き来る夕風に、打ち寄する漣みては、げに立ち歸
 らん心地も失せぬ。

夏もやう／＼深くなりぬれば、樹として茂らざるはな
 く、草として榮えざるはなく、深緑の木立こそ花に
 もをさ／＼劣るまじけれ。

○惶 餘りおそ
れたるによりて、
何として宜しきや、
目から知らぬほど
の體におそるゝこ
となり。
○怖 多くは驚
かすときに用ふな
り。
○悞 甚だしく
ねそれ驚く意なり。
○思 人を慕ひ

ことしは俄に暑さの烈しくなりし故にや、夏蟬の鳴く
聲も、いと少なくて、暑さ堪へがたしとて、團扇を
すつる間もなし。
日盛りの堪へがたきに、草刈る賤もあるものを、など
か暑しとのみ言ひ暮すべき。
夕立の晴れゆく跡の空に、瑠璃を流したらん様のこと
あるなど、其の麗しきにも似で、暑さは、いと蒸
し暑し。
朝夕見れば、遠き近き、山のたなはり、雲のたちま

て、こひしく思ふ
こと、又すべて、
廣くおもふことに
用ふ。
○念 思よりは
稍軽きものにて、
常に心に忘るゝこ
と能はざる意なり。
○想 ねもひや
る意なり。即ち彼
の人の心の有様を
ば、おもひはかり

ふさまも、たゞ、目の前なる心地す。

○新緑

翠したるばかりに茂る庭の樹々は、見るからに涼し
き心地ぞせらるゝ。
新樹は、枝をまじえて空につらなり、緑もて織りなし
たるが如し。
緑葉菁々、翠色將に滴らんとす。
殘紅は没し盡して、新緑正に堆し。
四顧陰々として、晝猶ほ暗きがごとく、實に神仙の境

て察しやることなり。
○惟 外の事などは、少しも思ふことなくして、一圖におもひこむこ意なり。
○憶 常に忘れずして、心中におもひ居ることなり。
○懐 物を懐中に藏し居るがごと

たるを失はず。

緑蔭深き所に榻を置きて踞するとききは自から炎威の赫々たるを忘る。

修竹緑を滴し、清風徐に來たりて、心神の爽快謂ふべからず。

緑樹の下に、暑を避くるときは、夏猶ほ寒き心情を催すべし。

○瀑布

一道の銀河、九天より落つるに似たり。

く常に忘れずして思ひ居ることなり。
○送 人の行き去るを送ること。
迎の反對なり。
○贈 物を人に與ふる意なり。
○遺 物を持ち行き、先方に置き來たる意なり。
○饋 食物などを取りて、神又は

白練高く懸りて、樹木に蔽はる。

滔々として懸河をなすは、某瀑布なり。若し之に近づくとときは、耳殆ど聾するに至るべし。

高からずといへども、其の幅廣く、飛沫は雨のごとく、又霧に似たり。

斷岸絶壁は、恰も削れるが如く、之を仰望すれば、虹の現る、を見ることあり。

斷崖に觸れて珠を碎き、怪岩に當りて、雪を崩すが如く、其の雄偉なる状は名狀すべからざるなり。

佛きつぷに供し奉るの意なり。
○驕おごる 何事に拘かはらず、人に示しめして誇たかりたかぶることなり。
○侈おごる 衣食住いしょくじゆについて、其の外貌がいぼうを立派りつぱにすることなり。
○奢おごる 是れ亦前者さきと同じといへど

三伏さんぷくの暑あつといへども、瀑下ばくかに至るときは、皮膚ひふために粟あわを生しやうずべし。
直下ちよくか三十有餘丈さんじゅうごじゆぢやう、遙はるかに天あまより落おつるが如ごとしと云ふも、敢あへて誣しひざるなり。
大瀑おほいばく跳をりて深潭しんたんに投なじ、霧氣きりき四邊しへんを擁ようして、五彩さいさいを放はなつもの、洵まことに奇きなり。
蘇苔そたがひ滑なめにして漆うるしの如ごとく、葛蔓かつまんは所々ところどころに匍匐はくふくして、瀑下ばくかに達たつし難がたし。
實じつに此こゝの附近ふきんに於ける第一くわんぱく觀瀑くわんぱくの好位地かうみちにして、最も

も大おほに華美くわびを装よそふ意いなり。
○傲おごる 人を輕かろんじ侮あはれる心こゝろなり
○倨あはる 人に對たいして、なすべきことをもなさず、且かつつ禮れいを缺かきて顧かへりざる意いなり。
○怠おこたる 爲なすべきことを厭いといて、行いはざるものなり。

避暑ひしょに適てきす。

○納涼

夕風ゆふかぜの吹ふき來きるよりも涼すずしきは、松まつの間まに出いでてし月の、雙龍さうりゆうの珠たまを争あへるがごときものなるぞかし。
夕風ゆふかぜに涼すずしき軒端のきばの鈴りんの音ね、釣葱つりしのかと相對たいして面白おもしろき心地こゝろぞせらるゝ。
灰はいなる影かげに、青葉あおばの露つゆの、きら／＼と見みえて、同じく吹風ふかぜも、殊ことに涼すずしくぞ覺おぼける。
欄干らんかんに肱枕ひぢまくらして、吹く夕風ゆふかぜに面おもてを拂はらはしつゝ、眺ながむる心

○惰 勤るの反
 對にして、怠より
 もなほ甚だしくな
 まけることなり。
 ○懈 今までの
 決心をゆるめて心
 の大になまけるこ
 となり。
 ○覆 上にか
 て被せること。
 ○被 つゝみか
 くすことなり。

の如何に心地よからん。
 舟に棹さして沖に漕ぎ出づれば、海より吐き出された
 らんかと思はるゝ大なる月の浮み出づるこそ心地よ
 けれ。
 月東山の嶺に出て、銀波を漲らしたれば、舟を中流に
 浮べて、涼を納る。
 清風明月を閑却し來たらんことを憂ふ。
 涼風一陣、忽ち苦熱を忘れ、心神自から爽快を覺ゆ。
 海風は、月を吹きて銀波漂へり。

○掩 さへぎり
 てかくすことなり。
 ○蓋 物に蓋を
 なす様に、かくす
 こと。
 ○赴 目的の場
 所にゆくことなり。
 ○趣 行くこと
 にも用ひ、又事が
 ちにも用ふ。即ち
 趣意などのごとし。
 ○趨 走りゆく

○海水浴

紅白の三菱旗は、半圓環を形づくりて、海の中に樹て
 られたり。是れ水浴場を標示したるものなり。
 波は、岸を洗はず、入海の内は、鏡の面を見るがこと
 し。
 子女は、磯邊に嬉々として戯むれ、老婦は、波打際に
 漂ひて浴しぬ。
 此の灣内は、最も水浴に適ひ、少しも危むべきところ
 なし。

ことに用ゆ。
 ○惜をしむ 残り多きこと、又捨てがたきこと、をしいといふことなり。
 ○愛をしむ 可愛うしてをしいといふこと。
 ○吝をしむ 物事にしわきこと、金銭などをきたなくをしむを、吝をんしよくといふ

海は、遠淺とほあまにして、水清く、砂白く、深き所といへども、其の底そこを見ざるはなし。
 海水浴かいすよくに遊あそびしに、子女の多くは、色の焦こぐなも厭いとはで、游泳いうえんしつゝあるを見たりしが、其の活潑くわつぱつなる、これぞ海國男兒の母となるべきかと思はるれば、人意いを強つようするものあり。
 空氣清くわいきよく、少しく俗塵ぞくじんを蒙かうりらざるは、最も海水浴かいすよくに適てせる地なりと謂ふべし。

○杜鵑とけんを聞きての感

がごとし。
 ○齋をしむ 前に同じ。
 ○治をさむ すべてすべの事に注意して散亂さんらんせざる様になすことなり。
 ○修をさむ 物事の悪しき部分ぶぶんをば、次第たがひに改めゆく意なり。
 ○收をさむ 物を自分の方に取り入るゝ

庚子かうし、四月十五日の朝、杜鵑とけんの始めて鳴くをきく。立夏りつか後十日なり。去年は、立夏の日より鳴き、又、今年は、去年より十日後れたるは、季節きせつの遅速ちそくあればなり。われこの鳥の聲を聞くごとに、故兒こじ琴嶺きんれいのことを、思ひ出で、悵々おろくたり。物によりて懷舊くわいこの情あること、人みな然り、景によりて情起り、情をもて景を思ふ。もろきは人の心なるかな。

○納涼なすやの記

紀きの守まもにて、したしくつかふまつる人の、中河なかつのわ

○納 とらひ 是れ亦前に同じ。
○理 まこと 物事の筋道をば、明白に立つることなり。
○犯 とが 定めたる規則などに違ひて、事を行ふものを云ふ。
○侵 ひそかす 他の地位に窃に入り込むこと

と。即ち其の場所などを取ることを云ふ。
○冒 かぶ 物を被りて進むことなり。風雨を冒して進行するなどの類是れなり。
○干 こぼす 人に希ふことこの意の極めて強きものをいふ
△わ

たりなる家なん。この頃、水堰入れて、涼しきかけにはべると聞ゆ。(中略)寝殿のひがし面はらひあけさせて、かりそめの御修設したり。水の心ばへなど、さるかたにをかしくなしたり。田舎家如しはかきして、前裁など、心とゞめてうゑたり。風すゞしくて、そこはかとなき、虫のこゑく聞へ、ほたるしげくとびまがまひて、をかききほどなり。人々渡殿より出てたる泉にのぞみて、酒のむ。

○漁村

あまのすみかばかり、あはれなるものはなし。いと、たよりなき海邊の風も、たまらぬ松かげなどに、だ、かりそめにつくりたる、わらやどものさま、浪うちよせなば、やがて、ながれもうせぬべう、いはかなげにみやるを、繪にかきすすさびたるなどは、なにかちかせましと思ひやるに、心ぼそし。ゆふつかたなど、としおいたるをこの手がらみしたるが、いそべにたちて、けふはいとねそくもあるかななどいひつゝ、沖のかたをまほりをり、うまごど

(四) 科 資 の 文 藝

○分わか 別々に引
 きわくすることの意
 あり。
 ○別わか 此れは此
 れ、彼れは彼れと
 して、別々にわく
 ることなり。
 ○班わか 一つの物、
 又は多くの物を人
 に分ち與ふるなり。
 ○判わか 二つに切
 りはなしわくるこ

もにやあらん、まさごのうへを、はしりたるきつゝ、
 あそびあたるに、入日さしたる鳥かげより、みつふ
 たつ歸りくる舟の、かぢ引きをりて、ほこらしげな
 るを、老人まちゑがほに打ちほ、ゑみたるは、さち
 多かりしにやと見ゆ。なぎさによせて、とびねるゝ
 まゝに、つなくりよせなど、とかくしつゝのゝしる
 に、男も、女も、あまた出で、おほきなる籠かごに、
 魚どもとり入れつゝ、になひもてゆくさま、さはい
 へど、にぎは、しげなり。くゝつめく物もてきて、

(四) 門 令 時

となり。
 ○頷わか 班と其の
 意を同じうす。
 ○僅わか 物の數な
 どの少なきことを
 いふ。
 ○糺わか 或る事物
 の中に於いて、最
 も必要なる點のみ
 を擧げて、其の豫
 想よりも少なき場
 合などに用ふる意

ちいさき魚三四、こひもてゆくわらわなどもあり。
 すべて人多く立ちこみさはぎて、舟のあたりかしが
 ましく、さしよりて、のぞくべうもあらず。いと長
 き網あみの、渚なづさにかけほしたるを、くりためてとりいれな
 ど、やうくしづまりゆけば、こなたかなた、火と
 もしたるすきかけ、かべもあらはにて、いとあはれ
 にみゆ。一夜やどりてみれば、浪風のひゞき枕まくらをゆ
 すりて、つゆまどろまれず。曉あけがた、となりの家々、
 めざまして、なりはひのことゝもなるべし、あやし

なり。
 ○笑 口を開け、
 聲を揚げてわらふ。
 ○嗤 嘲り笑ふ
 こと。
 ○咲 花が、咲
 くこと。
 ○晒 大口をあ
 きて、齒まであら
 はして大にわらふ
 こと。

△か

うきししらぬことどもを、あのがじ、こはだかに
 いひかはしたる、げに、あまのさへづり、めづらし
 かしもをかしうも。

○秋

秋の七草、いづれかあはれならざらん。

夏も、はや過ぎて、秋とはなりぬ。

女郎花、露をかざして姿さへ、にほひさへこそなまめ
 かしけれ。

秋きぬと、目にはさやかに見えぬども、風の音もあど

○歸 往くの反
 對にて、來たりし
 方に向ひてかへる
 ことなり。
 ○還 前の歸と
 意を同じくす。
 ○返 廣くかへ
 るいふ意味に用ひ
 らるゝなり。
 ○廻 急に方向
 を變轉してかへり
 來ることの意なり。

ろかされて、破窓の下に夢のさめてければ、いと寂
 しき風情あり。

桔梗、かるかや、女郎花など、いづれも今をさかりに

咲き匂へる野邊に出でなば、春にもをさく劣らざ
 る眺あるべし。

や、秋に入りたつけはひは、はや虫の音にて知られた
 り。

春も秋もめでたけれども、旅は、秋こそと思ふ。野邊
 の千草の、やう／＼うらがれゆく中より香ばしくも、

○復かへ 今來たり
たる道を、其のま
ゝ引返して、かへ
り來ることの意な
り。

△た

○扶たす 將に倒れ
んとするをば、起
したすくる意なり。
○輔たす 互にたす
け合ふ意なり。
○助たす 力を添へ

霜しもに傲あれる菊きくのやさしく咲さけるを見れば心地こころぞ爽さわ
なり。

待まちちわびし峰みねの紅葉もみぢも、稍くち朽く葉色はいろに染そめかへて、吹ふく
風かぜにひらくと落おつ。

入相いりあひの鐘かねにはなれし古寺こじも、こゝろを送おくる秋あきの夕暮ゆふぐれ。

秋あきたちて、未また程ほども經へざれば、殘のこんの暑あつさもおもひや
るだに物ものうし。

樹き々の梢こゝろも、やゝ色いろづきて、秋あきの半なかも來きぬれば、霜しも刈き
る人の忙いそはしき。

てたすくることに
て最も廣く用ひら
るゝ文字なり。
○作たす 人の傍そばに
ありて助たすくること。
○佐たす 輔たすの字と
同意義どういぎなり。
○縦たす よしやと
いふ意なり。
○假令たとひ かりに
例れいを假かりていふと
きはといふ意味な

秋あきも、やうく深ふかけゆくまゝに、そのふの萩はぎも、まが

きの女郎花むすめがはなも、皆みなうつろひゆきて、見る姿すがたのいやし

きは是非せひもなし。

唐綿織からにしきり成なせる八千草やちせんくさも、うら枯かれて、見るだにあは
れを催もよほしぬ。

秋あきの暮くれのさびしきは、古人こじんも、つとに述のべられたるは、
枯枝かれはなに鳥からすのとまりけりあきのくれ、とはいと寂さびしき

風情ふうせいなり。

朝あしたの風かぜ、いはん方あたなく涼すずしげなるに、心こころひかれて、近

り。
 ○假使 或る事をなすに、其の假設に用ふるものなり。
 ○假如 假令に同じ。
 ○乍 定まることなくして、最も變じやすき意なり。
 ○忽 急に、すぐになどいふ意。

きわたりも、そゝろありきせんとして、露の道しばふみ別けつゝ、そこはかとなくだどりしかば、虫の聲みへきこえておもしろし。
 小川の水もやゝ澄み初めて、小魚のこゝかしこと潜めるは寒さに近づきしものと推せらる。

○秋草

秋の野の草の袂か、花すゝき、穂に出てまねくは、袖と見ゆらんかし。
 千草の種々なる中にも、菊こそ此上なうめてたけれ。

△
 ○背 反對に變心することにして俗に所謂うらがへるとの意味なり。
 ○畔 背と同じ。
 ○反 叛と同意義なりといへども其の用途狭し。
 ○倍 背と同意義なり。
 ○負 物を背後

さるは霜のおける朝、よはれる色もなく、さやけく咲き出で、得も言はれぬ風情なり。
 菊の花の、色香も勝れてめでたきは、霧なつ春より根分して、培ひ養ひつゝ、丹精をこめてければなるべし。
 望みて涯なき武藏野を狩りゆくに、桔梗、かるかや、女郎花、穂に出てたりし薄さへ、我れを招きて迎へける。
 錦色どる野邊の萩原も、つゞりの衣の名残つれなきまでにむらがれゆき。

にする義なり。即ち後に負へるがごとしとの意なり。
○誹 道理を明かにして、人の短所を彼是と非難することなり。
○謗 當人の居らざる場所に於いて、其の人を彼是と悪く言ふこと、の意なり。

○誦 誦と殆ど相同し。
○誹 面たり先の人の困ることをば、無遠慮に非難することなり。
△つ
○遂 此の事より、彼の事に及ばず影響を指していふものなり。
○終 終局の意

白露を玉にぬくとやさしがにの、花にも葉にも糸をみなへし、とは、げによくこそうたひたれ。
薄の風に揺られつゝ、此方、彼方に、なよなよとするは、誠に秋のさまなりけり。

○虫

秋のあはれば、虫の音ばかりなるぞなき、夕の露は、ものゝふのこてさし原に立ち、入月の影は、赤駒の足がら山にかくろいぬ。
鳴虫の聲は、都にて聞きつるよりも、いと異にて、ま

すらをと云へる人に等も、得堪へぬ歎きをましつらん。

虫の音の、千々に心をくださけり。秋の夕にひとりすまへば。

秋の野に、道ふみ迷ひければ、いづれをさすにも目あてなかりけり、唯、虫の音をたよりて行きぬ。

露ふかき草原をわけゆけば、すだく虫の聲、いとも哀れを催しにけり。

虫の聲は、我れを招ける薄の彼方にして、足音におそ

料資の文美 (〇五)

味あり。
○竟 つまり、
と云ふ意にして、
即ち畢竟といふこ
となり。
○卒 果ては、
といふ意なり。
○毎 度々、毎
々などいふに同じ
○常 平生、居
常などいふに同じ。
○庸 常に同じ。

(一五) 門 令 時

△な
○何 先の意の
判然と分らぬとき、
何事ぞと問ひ質す
意なり
○奚 胡 曷
此の三字は、いづ
れも皆、何の字と
其の意味を同じう
す。唯。軽重の別
あるのみ
○無 無くない

れてや止みぬるもいぢらし。

ひぐらしの鳴く山里の夕暮は、いと寂しくて、風よ

り外に訪ふものはなし。

色々の音の中にも、わきてやさしく聞ゆるは、松虫の

訴ふるが如くにぞありける。

半枯れたる草の茫々たる中にも、虫の音の聞ゆればこ

そ、秋の價ぞしらるれ。

○秋月

いつはあれども、照る月の秋のさかり、いづこはなれ

ど、ゆく水の隅田川に、夕浪のふたぐにかけたる月

見んとて、からやまとの文人、いと澤に集りぬ。

秋の月の山邊さやかに照らせるは、散りしく紅葉のか

ずを見よとてにや。

賤が伏屋に照る月も、宮居を照らすその月も、月に二

つはなけれども、同じく光を仰ぐこそ、實に治まれ

る御代のしるしにや。

光を添へし玉川の、水にきらめく秋の月も、いとよの

やかに眺められけり。

との意なり。
○莫 比較上に用ひらるゝ、なし、といふ意味なり。
○亡 人などの昨日までも、生を保ちしものが、死してなくなるなどの意なり。
△む 目的點に従つて、打ちむか

久方の雲井に一輪かゝれる明月は、
一輪の明月、碧空にかゝりて、吟情頓に催すに至れり。
月ありて海なければ、其の觀を盡すに足らず、月と海と相待ちて、始めて觀月の快舉を得べからん。
水波漾々として銀鱗を漲らし、一幅の畫圖を展ぶると異ならず。
月は、東海に浮び出て、横棧たりし海面も、碧空のごとく望むに際涯なし。
水清澄にして月、影を漂はす。

ふことなり。
○迎 先より來りし人を、此方より出て、むかふること。
△う
○歌 節をつけ
て歌ふこと。
○謠 獨りうた
ふことに用ふる字
なり。
○謳 長き歌の

○紅葉
山は、ことごとく紅葉に包まれて、赤き雲の棚引けるを見る。
紅なる、黄なる、さては樺色せる樹々の葉のうるはしき、秋の景色の最中なり。
碧浪にうつれる断崖の紅葉は、水を燃やさばやとも思はれつるなり。
秋の山を飾れる錦は、風のために、ひらくと散り失するこそ衰なれ。

中より、僅に其の一部分を取りて、歌ふことなり。
○唄 唱ふる、誦するなどの意なり。
○撃 相手を破るがために、強くうつものを云ふ。
○伐 正々堂々と敵を、伐つこと。征伐のごときは是なり。

霜葉二月の花よりも紅なりとは、古人我れを欺かざるなり。

一望十里、恰も錦霞を晒すがごとし。

翠松は、秋錦の中に亭々として高潔なり。

楓葉既に紅色を呈し、美人の粧へるに似たり。

霜葉蜀錦を曝し、滿山碧色を見ず。

秋色の風に美しく、秋情こゝに閑にして、自から塵外の情をあらはす。

紅葉の葉の風に散りて、錦の雨を降らしたる風情の得

り。
○打 最も廣く用ひらるゝ字にして、其の意は軽くうちたゞくこと。
○拍 手をうち合すなどのときに用ふ。
○撲 打の字と殆ど同意なり。
○討 悪者をうつことなり。即ち

も言はれぬは、いと麗し。

萬紅葉ほろく散りて高雄山、瀧のとさびし冬や、やがて近きぬるを思ふ。

峰の松風、音づるときは、散りにしもみち葉の輕げに飛びかふは、得がたき風情。

秋の山を見れば、織る人もなき錦とおもほへ、紅葉の葉の嵐にちりて、曇らぬ雨とをなりぬるも、いとあ

もしろし。

時雨かとおどろきつゝ振り返り見れば、峰のもみぢ葉、

征討のごとき是なり。

△の上の方

のぼることにて、

下の反対なり。

○登 斜に高さ

處にのぼることなり。山に登るなど、

○昇 莊嚴雄大

のことに用ふるの

ぼるにて、日輪の

のぼるなど。

○升 強勢を以

て、すらくと、

のぼること、登に

相似たり。

△や

○安 心配する

ことなく、心の平

ひらくくと嵐に吹きおとされて、夕日に輝く其の麗しさよ。

○中野郊行

戊辰八月二十一日、大久保臺町、専福寺なる姉君のみはかにまゐりて、新田の方にゆきぬ、麻瑛稻荷の社あり、石もて、夜叉の形をつくり、水盤をいただけるも、古きものにて珍らし。石に、宥快といふ二字、幽に見えて年號もなし。それより淀橋をわたり、中野長者の塔を見て、寶泉寺に入り、南條山人の墓

を見るに、三十餘年を経たれば、苔蒸したり。堀の内妙法寺に行く。道、この頃の雨にて、水わき出でたるに、板橋わたし、木材をしきならべなどして、人をわたせり。參詣の男女、絶ゆることなし。此の祖師の、かく靈を發せしは、一とせ、深川淨心寺にて、開張ありし年よりとなん。今の張御符と云ふものは、古くよりありしものにや。鐘の銘は、享保五年の文なるが、其の事を記し置けるを見し事ありしに、今は參詣のもの、名刺を、多くはる事ありて、

○寧 やすし 安らかに
定まることなり。
○康 やすし 安樂の意
を含みたるもの
て、安康、康樂な
どのごとし。
○破 やぶる 物品が、
外力のため割
らるゝことなり。
○壞 やぶる 形状の正
しく存在せるもの
が、他力のために

その文も見えずなりぬ。十六世の住持日沼、學を好
みしより、此の寺に詣づるもの多くなれりとなん。
寺を出て、南の方、小道に入り、薄野菊の花を見つ
ゝゆけば熊野權現の小祠あり。側に大きな穴あり
き。もとの道にかへりて、釜屋横町より、中野の道
に出で、向の方を見るに、新井梅照院道といふ榜示
杭あり。久しく目とどめたれども、行きて見ず。け
ふは、日もまだ高ければ、小道にいたりて、高き所
をこえゆくに、松ならびたり、潦水ながれて、道

崩るゝことなり。
○敗 やぶる 漸々に悪
き部分より崩れ損
ず。又、戦に負く
るときなどにも用
ふ。
△ま
○又 また 其他また、
此上にまた、とい
へるがごとく、相
似たることの幾度
となく繰り返さる

もたきなんとするを、ゆく／＼見れば、雜木、枝を
まじえ、茅、薄所えがほなり。四とせあまり先に、筑
前の塚崎といふ所の山こえし心地ぞする。やう／＼
馬場下の街道に出づれば、中野より、十五町とする
せる榜示杭あり。すこしその方に、また、梅照院へ、
三町とかける杭たてたり。うれしくゆきて見れば、
格の木の垣に、赤く塗れる門あり。本堂の前に、
梅四五株あり。本堂の額に、醫王堂とあるは、三井
親和の書なり。又、養育薬師ともいふよし。側に、

いことなり。
○復 同一の事柄をば、二回繰り返してする場合に用ふ。昨日行きしが、復、今日も行くなど。
○亦 名詞と名詞との關係について、いふときに用ふ。我れも行きたるも亦、行くなど

一の石表あり。夫より、馬場下街道を、東さまに行へこと敷町にして、落合村、小瀧橋をわたり、高田馬場へ出で、家に歸れば、酉の半なるべし。

○暮秋

九月十餘日、日野山のけしきは、ふかく見しらぬ人だに、ただにやはおぼゆる。嵐に堪へ木々の梢も、峯の葛葉も、心あはそぞしう争ひちるまざれに、尊き經の聲かすかに、念佛などの聲ばかりして、人のけはひは、いとすくなう、木枯の吹き拂ひたるに、

の類なり。
○待 確に來るべき人、又は、將に起らんとする事などをまつものなり。
○俟 來る事物の何時なるか、又、果して來るべきや、否や、疑はしき場合などに用ふるものなり。

鹿は、ただ籬の本にたゝずみつゝ、山田のひたにもおどろかず、色こき稻どもの中にまじりてうちなくも、うれへがほなり。漣の音は、いとど物忌ぶ人をおどろかしがほに、耳かしがましうとどろき響く。草むらの虫のみぞ、よりどころなげに、なきよわりて枯れたる草の下より、りんだうの我ひとりのみ心ながらはひいて、露けく見ゆるなど、皆例のこのころの事なれど、をりから、ところかきにや、いと堪へがたきほどのものかなしさなり。

△こ
 ○以來 自來と
 いへると同じく、
 或る事の起りし時
 より、其の間の年
 月を見て、其の當
 時に至るの○なり。
 ○而來 或る時
 より今日に至るま
 でといふ意なり。
 ○爾來 或る事
 の起りし時より、

○擣衣の心を

秋の夜風、やう／＼身にしむ頃にかりぬれば、賤の
 女は、衣をときあいなどすとて、いそぐにやあらん。
 ひまなくきぬた打つおと聞ゆ、から歌には、つまの
 遠き國にあるをこひつゝ、ものする心にいひたるぞ
 おほかる。さる人の打ちたらんおとないは、げにい
 とあはれにこそ。さらでも露霜のふかき夜に、鳴き
 よわりたる籬の虫の音にかよひて、かすかなる音の、
 まぎれず聞えたるは、琴笛の聲ならねども、えんな

といへる意なり、
 ○以還 以來と
 異なることなし、
 ○請 懇にたの
 みねがふ意にて、
 祈るもとむること
 に用ふ。
 (乞) 物事をた
 のみ求むる心を主
 とするものにて、
 彼の物を乞ふなど。
 ○是 心に曲直

ることのつまにもしつべく、いと／＼ものあはれな
 りかし。

○月を観る記

今年もはや、半過ぎぬれば、いつしか、秋のけしき
 だちて萩吹く風も、身にしむ頃なり。久しく翁が
 ゆかねば、このほどの老のねざめも、覺束なし、い
 ざ、たづねとはんとて、ある夕暮に、例の人々、打
 ちつれて来しが、又もまゐらんとて、歸らんとせし
 を、翁とどめて、今宵は、月もよし。薄酒すゝめま

正邪を判断すべき
或る道理に對して、
用ふることなり。
○此 彼に對し
て、手近にある場
所、又は形のある
物の指示して、明
かに、此と云ふ語
なり。
○茲 時の場合
といへるが如き場
所に用ひらるもの

あらせん、強いてとまりたまへといへば、翁の心に
は、いかで背くべき、さあらばとて、各、座をし
めて、清談の露、やう／＼繁きほど、家人、やがて
心得て、取りあへぬまでに、あるじさうけし、さか
なとりそへて、盃出したり。諸客みな酔ひて、興
に入るとぞ見えし。其の後、獻に及びて、玉山倒
る、ばかりに見えけり。さて、翁いふやう、大かた
月をもめでじ、とはよみたれども、老の心も、月み
るにぞなくさみ侍る。されど、それにつきて千載無

にして、強く茲と
云ふ意なり。
○之 此の字は、
是と此との兩者の
意に用ひらるゝも
のとす。其の意は、
ともに重からずし
て、上若くば下に
ある所の事項に於
ける代名詞とも云
ふなり。
○諸 之と殆ど

窮の感も起りぬれば、うべ、月を、人の老となる、
ともいふべかめり。但、月をみるにいろ／＼あり。
今、思ひ出し侍りぬ。童子のとき、家にて、八月十
五夜の宴に、ひとり、隅にむかひて居たりしに、さ
る武士の、一丁字も知らぬが、月を、つく／＼と見
て、月は、わたり幾尺かあるべき、各、考へて見た
まへといふ。又、同じ様の人、かたへより、あれは、
もの、切口と見ゆ、奥へながさいかほどかあらんと
て、互に僉議しけるを、聞く人々、皆、舌を喰ひけ

其の用所を等しくす。故に意味も異なることなし。
○斯 充分に其の方に心を向け、其の物事の理合をも含みていふものなり。故に是又は此よりも、其の意の重きものなり。
○維 多くけ文句の初めに用ひら

り。翁も、をさな心にをかしかりき。今、思へば世俗、月を賞して、光のあかきを誇り、影の清きにめで、良夜とて、たゞ、打ちやり、物喰ひ、酒のみなどして、歌ひの、しるを、樂とするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。又、騷人、墨客の月を眺めて、字ごとに金玉を彫り、句ごとに、錦繡を載するも、風雅にはきこゆれど、それもたゞ、景氣のうへをもてあそぶばかりにて、月に深き感あることを知らぬなるべし。翁が、千載無窮の感と申すは、

る字にして其の意義は、人の注意を喚起せしむるにありて存す。
△え。あ
○選 多数のものの中よりえり分くることに用ふ。
選舉のときは是なり。
○撰 記述するなどのことに用ふ。

我儕、古人を慕ひて、その書を読み、その心をしりつつ、常に世を経たる恨あるに、月ばかりこそ、世々の人を照しきて、今にあれば、古人の形見とも言ふべけれ。されば月に對して、昔をしのびては、さながら、古人の面影もうつるやうに覚え、月は、もの言はねども語るやうにもおぼえ、忘れては、むかしを、とはまほしくも思ふぞかし。

○冬

山風に堪へぬ木々の梢も、峰の葛の葉も、心あはた

撰輯せんしゅうなどのこととき
是れなり。
○擇たく 善惡ぜんあく良否りょうひ
をえり別わかくする意いな
り
○簡かん 善良ぜんじやうなる
ものをえり抜ぬくこ
となれども、其の
意は選せんよりは稍弱せうじやく
し。
○畫え 物の形態けいたい
を寫うつしたるもの。

しう、争あそひちり紛まれぬ。

秋暮あきぐれて、冬の來きるをも、草木そうぼくの色いろぞ知らするや。

萩吹あぎふく風かぜも騒さわがしく、露つゆぞ袂たもとを潤うるはしける、時ときしもあ

れ、蟲むしの聲こゑ絶た々たに、草くさのとさしも枯かれにけり。

あはれに物寂ものさびしき秋あきも、いつしかに暮くれはて、猶なほほ

しをりゆく袖そでの露つゆ、身みをくだくなる夕ゆふまぐれ、實じつに物

の哀あはれは、冬ふゆの初はじめにぞ知らるる。

冬ふゆの夜よの寒さむけきに、師走しはすの月つきの、曇くもりなくおし出でてたる

を、籠かごを揚あげて見たみたまへば、木枯こがらしに誘こそはる、木々きぎの

○描えがく 寫うつし取る
こと。

△あ

○在あり 居ゐるとい

へる意味いみに用もちふる

字あにして、物體ぶつたいの

ある場所ばしょについで

云いふなり。

○有あり 無なしとい

ふ反對はんたいの意いに用もちふ

るものにして、或

る物高ぶつたかの有無ゆうむをば

落葉らくはつのひらくと飛とびかふ様ようぞ寂さびしかりける。

柳やなぎの夜よこめて打うつつ斧おのの音ねも、丁々ていせいとして悲かなしく思おもふら

め。

水葉みづは飄落へうらくして、山野さんやま忽たちち寂然せきぜんたり。

霜しもは、白しろく籬まがきに見みえて、吹ふく風かぜの寒さむく覺おぼゆれば、はや

神無かんな月にやなりにけん。

夏影なつかげとたのみし椎しほの木きの、今は其そのの下もとにありて、落おつ

る拾ひろふも、おもしろし。

谷川やがはも、落おつる木きの葉はに埋うもれて、水みづの音ねの細こく聞きゆ

直ちに指示するものとする。
○顯 明白に光りかゞやきて見ゆることに用ふるなり。
○露 隠るゝことなく外よりよく見ゆるものゝごとき、皆之を用ふ。露止、露頭のごとき類なり。

るは、冬の山里の景にや。
庭の梢に二葉三葉、秋の名残は残れるを、遠山の端、今朝見れば、はや、初雪のふれるを見とめぬ。
賤が家に鬪うつ音の遠く聞え、或は夕を告ぐる山寺の鐘の、池の底にひゞき渡るなど、哀れを催さざるに
なかりき。
軒端の風も吹き堪へて、はや、ふりをむる初雪に、友や、とふらんと出で、見れば、小狗の戯れて遊ぶなる。

○現 隠れ居りしものが、あらはれて見ゆるに至りしをいふ。
○見 現と同じ。
○著 顯と同じ。
○形 現と同じ。
く形をあらはすなり
○集 各所に散在せるものを取りて、一所に寄せあ

時雨と、もに降りまがふ、木の葉につきて、今年も、はや、名残少ななりぬ。
霜ふかき夜半の嵐にちりはて、梢にかゝる月など出で、物のあはれぞ、今ぞしりぬるにや。
有明の空にのこる月影の濟みわたりて、月の光か。霜の色かとまがふなり。
峯の松風、いとはげしく吹きまよひ、さらぬだに、空もかきくもりて、折しも降れ時雨の軒端を打つなど、實にや、かなしとも、寂しとも云ふべからん。

つひること。
 ○聚 集と同一の義の如くなれども、集は、自然的の場合も含む。即ちあつまる、といへるがごとし。
 ○華 俗に所謂「よりたかる」といふに同じ。
 ○遇 期豫することなくして、偶

○雪

今朝は、珍らしくも初雪のふりてければ、はや積るらんと思ひ居けるに、まもなく解けしは、なほ時候の暖なるにや。
 白銀を展べたらん様にて、見るもまばゆきことにぞありける。
 いづれを眺むるも、皚々として照るがごとくなるは、誠に麗し。
 昨夜より降りしされる雪の、今は、はや埋く積りて、

然に出であふことなり。
 ○逢 豫て約束をなし置き、互に出あふことなり。
 ○遭 殆ど逢と異ならず。
 ○會 ①よりあひ、といふ意に同じ。會合など、即ち是れなり。
 ○合 物事の同

足踏みもできずなりぬ。

雪は、豊年の兆とや、いふべければ、耕しつくる人々の喜べるは、まことに無理ならぬことぞかし。

黒き小狗の、降れる雪の中に埋もれるがごとくに、狂ひたはむる、様面白し。

木々の梢に不香の花を開き、珠玉を飾りたるにさも似たり。

○一日の雪 「雪見の記」

冬も、やうく深くなりけるに、暮れゆく空のけし

じ様に相應じて、
一つになることの
意なり。
○謬 一定不動
の筋道を離れて、
紛れみだるゝこと
なり。
○誤 多くは不
注意に因りて、相
似たることの幾つ
もあるために、自
から發生するところ

き、すさまじく、雪も、ちらく／＼うちりしが、と
かくするほどに、日もすでに暮れはて、鳥羽玉の
闇さへいとどうとまし。かくて、夜もふけゆくまゝ
に、夜さむ、身にしみわたり、しばしもいねやら
て、丑みつげかりになりぬるに、鐘の聲も聞えず、
鶏の音もせで、なにとなく、静になる様に覺えしか
いつあくるともなく、窓のしらみあけるほどに、家
にありしわらわよびおこし、闇の戸あけさすれば、
夜の間、雪いとおもしろうふりつみて、庭の草木

ろの正しからざる
ことなり。
○訛 世の中に
於いて、習慣とな
いる正しからざる
ことをいふ
○錯 物事を紛
亂せしめて、其の
いづれか正しきも
のなりや、位置を
取りかへたる不注
意の過失をいふ。

も花さき、にはかに、春來たるこゝちし、四方の山
の端も、みな白妙になりて、人間世界、さながら、
天上の白玉京かとあやまたるゝ折しも、あたりち
かき池の水鳥の、聲々になくも、程なければ聞ゆ。
さこそ波のうさねのさむからめ、とそれさへあはれ
を添へて、さても、心あらん友もがなど、人ゆかし
うおもひし折ふし、いつもとびかはす人のもとより
とて、文もて來りぬ。いそぎ開きて見れば、めづら
しき雪にてはべる。いかゞ見たまふやらん。さては、

○過 不注意のため
ために起りたる失策なり。
○嗚呼 悲痛、哀傷、歎美にも用ひらるゝ語にして、さてもくゝと譯すべきもの。
○於戲 重に莊嚴なる場合に用ふるものにして、嘆美する時に發する

此の雪は、御起ふしも覺束なく思ひ侍るとなん、かきけるにつけて、かの兼好が、雪のいと面白うふりたりしあした、人がりいふべきことありて、文やるとて、雪のこと、なにとはいはざりしに、此の雪いかゞみると、一筆いはぬとて、口惜きことといひこせしことを、ふと思ひ出で、是は、あなたより、かく氣をつけていひおこせしを、こなたより返事なれば、うらみやせんと思ひしまゝに、使、しばしまたせて、返事かきておくに、

○嘆 心中に
心の中に
○嘆 悲痛に堪へざるに際して、心底より發すると。ころの歎辭なり。是れ亦悲痛悼惜の場合に發する歎辭にして、國語にて

空にふる雪はこずゑの花なれや

ちるかさくかとおやまたれける

と、さて、さて、けふは、ひとへに、さびしく、らし侍る、思ひとぢいひあはせて、來られよかし。これこそ、誠の志と思ふべけれといひやりけり。かくて、やの日たくるほどになりて、門をたたく音しけり。人してあけさせれば、かの文おこせし人、例の人々ともなひて來にけり。形のごとくあるじ設けして、翁、うれしく寒さわすれて、にじり出で、か

は「え」と驚くが
ごとき場合に用ふ
るものとす。
○嗟乎 嗚呼と
異ならず。
○嘻 怒り罵る
とき發する語なり。
○預 此の意は、
今日にては、他人
のものを保管して
居ることに用ひら
るれども、本戦は、

たみに語りあひしが、酒あたゝめて出しけるに、衆
客、みな醉をすゝめて、清談、いと心よく見えし。翁、
あるじする心ばかりはこゆるぎの

いそぎありくにおとらめやきみ

われ等こと、足たち侍らねば、御爲にさかなもとめ
て、ありくことは、かない侍らねども、心ばかりは、
それにも劣り候ふまじと、戯れごとなどいひて、程
をへけるに、衆客けふの雪には、翁のから歌なくて
やはあるべきとて、翁に管を授けしに、翁、いやと

或る事を行ふに際
し自分も之に加入
ししてそれを行ふ
との意なり。
○關 心のかゝ
り居りて離れざる
をいふものなり。
○與 預の字の
本義と相同じ。
○肯 心に承諾
し、納得する意な
り。

よ、むかしは、雪、月、花の折にあへば、はや、詩
の思ひよりも候ひしが、今は、老いばれて、その心
も、さふらははず。詩も久しく捨て、作らねば、口溢
りて、いひ出づべきことも覺えず、されど、けふの
御たづね、忘れがたく侍るまゝ、いかさまにも、申
してこそ見めとて、しばし打ち案じて、

家住駿臺下。

隱雲平野樹。

吾老愧ニ安道。

門臨二萬里流。

棹雪遠江舟。

客來皆子猷。

○敢あて 人に對して、憚おそるべきことも少しく慮えんり遠とほすることなく、勢いきほよくすることにて、おしきりて、といふ意なり。

△さ

○先さき 前さきといふと同じく、時の上の區別にも、物の順序しんじゆにも、又過去

草臺偏閑寂。

喜共故人一遊。

もより翁が家は、地高く、長流ちやうりゆうに俯たし候へども、門は、ながれにのぞまず候ふ。然るに今の詩に、門臨萬里流といへるは、そらどこに近く候へども、言葉ことばつゞきよく、句勢くせいある様やうにと思ふより、かく申すに候ふ。草蘇州くそしゆうが、野渡無な人舟やどなひとぶね自横よこといひし類にて候ふ。されば、詩は、詞ことばに泥なみて、心ならず、不實ふじつになり候ふゆゑに、古より篤實とくじつなる人は、多くは詩を好このまぬも、理ことわりにて候ふ。たゞし、是れ程のこ

のことをいふにも用ふ。
○前さき すべて何事に拘かはらず、これよりも前といふことなり。
○嚮さき 是れ亦過去のことなりといへども、先さき、前さきよりは久ひさしからざるが如し。
○曩さき 過去の久

とは、詩にはゆるし申すにてもあるべく候ふ。常の言語げんごに、此のくせ出て申さぬやうに、意いふべきことにて候ふ。さらば、各々おのづかも一首賦しゆふせられ候へとて、筆硯ひつげんを授まげれば、一人、

冬天衝雪到君家。

此日倚欄眺望餘。

兩岸水寒如夾鏡。

千林樹合似開花。

又、ひとり、

天從三雪後一海寰新。
清白由來誰相似。

積素凝華先入春。
草堂高臥是何人。

しき前を云ふ。
○壯 強くして
大なること。
○盛 或る事物
に就いて、極度に
達したることをい
ふ。
○隆 前の盛と
殆ど同意義なれど
も又今後ますます
勢力を得るをい
ふなり。

又、ひとり、

欲問駿臺臥雪時。

行吟招隱太冲詩。

古人高義今何在。

此地無君誰共期。

又、ひとり、前の翁が、詩の韻を和して、

高堂幽棲地。

積雪暗長流。

歸騎迷來路。

漁人滯去舟。

行藏論古道。

經濟問嘉猷。

寄語世間客。

誰知塵外遊。

これより迭に唱和しける。かくて、酒酣になる程

○熾 火の烈し
く燃ゆる形をいふ。
故に最も盛なるこ
とにも應用するも
のなり。
△き
○切 二個以上
の數に切りわくる
こと。
○斬 多くは動
物をさきり離すに用
ふ。

に、翁も、今すこしくたうべんとて、のまんとしけ
るが、座中も、世に行はるゝ、散樂の謠によき人あ
りしに、翁、その人に、一曲と進めしかば、肩上の
笠には、無影の月をかたぶけ、檐頭の芝には、不香
の花を手折りつゝとうたひいだしけるを外の客もつ
げてうたひける。翁うちさりて、折から、よくこそ
思ひよられ候へ。山家搜中の景氣を見るやうもおぼ
え侍るとて、硯ひきよせて、

六出花裡三徑平。

忽聞白雪入歌聲。

○截 斬よりも
尚ほ細々に切る。
○剪 物をはさ
み切る意なり。
○伐 たしきさ
るに用ふ。
○裁 衣服地な
どを裁ちきるに用
ふ。
△ゆ 此の字の
用途極めて廣し。

歩みて行く意なれ
ども、唯、ゆくと
いへば、交通機關
を利用して行くに
も用ふ。
○往 さきへ進
行する有様を指し
ていふ。其の行く
先の目的の如何は、
之に包含せられざ
るものなり。
○逝 行き去り

市中賒酒酒家近。
玉樹玲瓏四隣合。
幽棲何減山陰興。
翁、諸客にいひけるは、律詩は、文字のもちひやら
こそ、簡要にて候へ、たとひきこえ候ひえも、相應
すると相應せぬとあり。又、一字にて、景趣を生ず
ると、意味なきとあり、自作の詩にて、申し候ふは、
いかゞに候へども、暫く愚意を申し候ふべし。此の
詩、第一句の平字かふべからず、雪深くして三徑の
堂上開書書帙清。
銀沙的皦一川明。
莫厭留談到日傾。

きはもなく、一つもふり埋みし體にて候ふ。第二句
の入字、字眼とも申すべし。諸君の謠を、白雪の曲
に比し、けふの雪の聲に入ると申す所も、意趣ある
にて候ふ。第五句の合字は、雪にて、四隣の樹の、
ひとつになるを申すにて候ふ。第六句の明字は、上
に雪を銀沙に比し候ふゆゑ、的皦には、明字的實に
て力あるやうに覺え候ふ。いづれも、心をつけたる
字にて候ふ。總じて律誌は韻字の取りやうにて、作
者の品は、其のまゝ知れ申すものにて候ふ。世間の

て、復た歸り來らざるの意なり。故に死去などの場合に用ふ。
○適 行先き主として行くところの意を含めり。
○之 目的地の明白ならざるに行くといふ意なり。舟の之く所に任すなど。

詩を作り申すもの、一兩句を得ては、韻になづみ、其の韻をさがし候ひて、しひて用ひ候ふゆゑ、さながら、韻に苦み候ふとされて、見ぐるしく候ふ。其の韻に相應の字なくば、其の一句をすきてかへ申し候ふか。又は、其の韻をすて、他韻にて作るべきことにて候ふ。唐詩の韻の用ひやうをよく考へて見るべし。是れ唐詩を學ぶに簡要のことなり。思半に過ぐとも申すべし。さて詩の僉議は、是れまでにて候ふ。今日の會ぞめづらしく思ひはべる。むかし、

○許 人の欲するところの事物を、それにて可なりとして、さしゆるすこと。
○宥 罪科あるをばゆるしつかはすことにて、寛大の處置に出でしとき用ふ。
○赦 是れ亦罪科をゆるすことな

子貢大蜡の祭に、會飲せられしを、孔子、樂しきかと問ひたまひしに、一郷の人、酒に酔ふて、狂するが如し。これをみて、何の樂しきことをか知らんと申されしを、百日の蜡、一日の澤、爾か知るところにあらずと仰せられきと家語にみえたり。民ども四時稼穡をつとめて、歳終に一日、飲酒宴樂して、百日の勞を忘る。是れ、先王の遺澤なり。民の長く勤勞に服して、相ともに、君澤に樂しむを見ては、君子も同じく樂しむ心あるべきを、子貢のそこに、心

り。
 ○免 責任を負
 はざるべからざる
 こと、又は、罪科
 に處せらるべきこ
 とをば、ゆるさる
 いに用ふ。
 ○釋 赦と相同
 じ。
 △め
 ○巡 物事につ
 いては、充分の注

づかれぬを、かくの給ひしなるべし。しかれば、翁
 も、諸君も、諸ともに飲酒宴樂して、一日の餘暇を
 樂しむ、太平の餘澤なり。幸ひに時も蜡のころにあ
 たれば、今日の會をばいはゆる一日の澤とも申すべ
 し。我等ごときは、民のごとく稼穡ご勤むることは
 なくとも、各々、學問をつとめ、忠信を修め、仁儀
 の道を世に明かにして、風教を助くることを忘るべ
 からず。是れ、太平の澤に答揚して、不報の報と申
 すべし。何、必ずしも官にをり、職に任ずるをのみ、

意をなして見まは
 ること。
 ○環 周圍を取
 り巻きて、輪のど
 とくになること。
 ○繞 物に巻さ
 付くことなり。蔓
 が、物に纏ひたる
 がごとき、是れな
 り。
 △み
 ○見 自然に目

國家に報ずと謂はんや。

第一編 天文門

○雲霞

此方、彼方かすみにあひたる梢ども、綿を引き渡した
 るが如し。

白雲天にのぼりて、忽ち山の巔をつゝみしかと見え
 しに、はや、雨の降り出したるこそ面白けれ。

春も、深くなりもて、霞わたりけるが、花もやうく
 のけしき立つ程こそあれ、風雨にせめられて、散り

にうつりて見ゆること。
○視 近寄つて見るに、極めて注意すること用ゆ
○観 或る物を見るに、其の傍に於いてすることなり。又、考察して見る意にも用ふ。
○看 目の上に手を舉げて、物を

らせぬ。

洲崎にたて白鶴の氣色も、千代をこめたる霞の空は、まことに、仙寰とや云はまくのみ。雲のたち昇れるは、富士の高嶺にやありけん、見れども、見えずなりぬるは、實に惜しきことどもなり。
蔽ひかゝりし村雲の断えまより、きら／＼と漏れ出づる月のさやけさは、得も言はれぬ景色なり。
薄霞の棚引きて、山の裾を包めるは、輕羅を纏ひし美人にさも似たり。

見詰むるといふ意なり。
○覽 觀と粗相同じといへども、それよりは意の強きものなり。
○視 見の字に相同じ。
○猥 取締のなき意なり。
○濫 むやみに、といふ意。

黒雲のにわかには湧き出でしは、驟雨の兆にもや思ひて、

おのづから、暑さをも忘るゝに至りぬ。

薄雲を帯びたる遠山も、包まれし樹々の梢の緑して、

いと麗し。

山もかすみ棚引きて、吹く風も寒からず。心地の爽快

なること、面白し。

雲の走れるは、月の動くかと怪まるゝばかりにて、景

氣の妙なること、類ふべきものもなし。

○雨露

○妄 順序をみ
 だし、禮義にはづ
 れて、輕々しくす
 ることなり。
 ○路 大小のみ
 ちに通用す。
 ○道 廣く大小
 のみちに通用す。
 ○途 小みちの
 ことなり。
 ○徑 最も細き
 道なり

長く旱しければ、田畑には、裂目をも生じたるに、膏
 雨を得てしけるほどに、農夫は、狂するばかりに歡
 喜なしぬ。
 まいて、雨なんど、うち降りたる夕暮の聲、何心もな
 き、山賤も、腹をたつべきぞかし。
 かゝる山里は、一しほ雨の音も、鳴神の音も、木魂に
 ひびきて、すさまじ。
 雨露を凌ぐべき軒端も、かたぶきぬれば、せん術もな
 し。

○静 △し 動かず、
 騒がはざることな
 り。
 ○閑 事柄の如
 何を問はず、すべ
 て、ひまなること
 なり。
 ○徐 言語動作
 の疾からぬことに
 ておちつきたる舉
 動なり

いかて村雨の降れかしと、庭の草木も、待ちかね顔な
 り。
 曉雨は、さまで烈しとにあらねども、木々の葉をちら
 して狼藉たり。
 輕風一過、靈雨落つ。
 時雨塊を破らず、莖を潤して、よく其の發育を助けぬ。
 急夜沛然として盆を傾くるが如し。
 露深うして歩むべからずといへども、などか此の好風
 景を捨てらるべき。

○暫しばらく 少しの間
 といふ意。
 ○姑しはらく 俗に、ま
 あく暫時、とい
 ふ意にて善惡とも
 に其のまゝに爲し
 置くこと。
 ○且いまだ 姑と粗相
 同じ。
 ○須臾しほちゆう 少時。斯
 此の三つは、
 いづれも時に關し

露しげき秋野の草木は、冬の迫れるをもしらで、鳴虫
 を宿らしめけり。
 白露は、はや江に満ちて、冬に近き頃となりしこそ悲
 しけれ。
 露の道芝たづね行けば、裾を拂ひて、珠を散らすかど
 とく見ゆるぞかし。
 曉露は、日に照りかゞやきて、五彩の珠を散らしある
 が如し。

○霜雪

て用ひらるゝもの
 にして、少時の間
 をいひ、其の意同
 じ。
 ○斥しほぞく 他動に用
 ひ、最も急速に、
 かつよく除去する
 ことなり。
 ○退しほぞく 或る場所
 より出て去ること
 にて、自動、他動
 いづれにも用ふる

曉あかつきに起き出て、見れば、板橋の上は、雪の降れるが
 如くに霜をおさぬ。
 何人にやはや、此の雪路に足跡を印したるぞ、青鞋の
 跡なれば、農夫にもやありなん。
 板橋に人絶へて、置く霜の眞白なるは、誠に雪のごと
 しとや謂はんのみ。
 深緑の上にしける霜のあざやかなること、喻へん方な
 し。
 雪は降れども、風なければ、たちまちの間に堆く積

なり。
 ○却しりぞく あとじさ
 りして、避さくる退
 ○記しるす 書かきしる
 ○誌しるす 是れ亦相
 同おなじ。
 ○識しるす 是れ亦相
 同おなじ。
 ○求もとむ 物事ものごとを尋たづね

りぬるぞ心地よし。

時ならぬ花の木々の梢こすえをにぎはしたるは、言はずも知るさ不香よかうの花にてぞある。

常に緑黛りよくたいにほこれる山々も、今朝けさは、白髪はくはつと化くわしたるこそ面白おもしろけれ。

枯蘆かれろに降ふれる雪の、いとさむう見ゆるに、鷺さぎの頸くびを縮ちぢめて徐々じょじょに徘徊はいかいするは、何のためによ、餌えを漁あさらんとてかくはなしつるならめ。

○日光

滿天まんてん拭ぬぐふがごとく、一點いってんの雲くもなく、日光にっくわう輝あ々として照てす。

旭日きょくじつ東海とうかいより浮うび出いで、金波きんぱ激げん々たり。

山巔さんてんを出いでし旭日きょくじつは、朝露あさつゆを解とかして、曉色きょうしきを破やれり。

曉色きょうしきを破やれる天紅てんかうは、其の深紅しんかうなること、常つねに見みるべからず。

高山こうざんに登のぼりて、太陽たいやうの出いでんとするや、東天とうてん微光びくわうを潮うし、次つぎで紫むらさとなり、群峰ぐんぽうは、波なみのごとく、其の影かげ

ねもとめ、又探たづねり
 もとむるにも用もちふ。
 又、乞こひもとむる
 といふにも用もちふる
 ものにして、其の
 意い甚じんだ廣ひろし。
 ○索もとむ 求もとよりは、
 其の意い稍しやうせまく、
 搜たづねたづねもとむ
 ることなり。
 ○需もとむ なくては
 ならぬ物を、心に

期してもとむる意なり。
○者 動物を意味するところの代名詞にして、多くは、人を指していふ。
○物 動物以外のものにして、形体を備ふるものとす。
○原 物事の由

糺糊たりしが、漸く分明に認むることを得るに至る。日時に暮れんとして、山光尙ほ餘光を受け、山影悉く紫色を帯ふ。
長空 新に晴れて、日光の送徹するときは、心氣自から爽快を覺ゆ。
微に雲間より漏るゝ日光のうらくしたるなど、方に三伏炎暑の候なりかし。
朝暾既に高く、炎威稍酷烈なり。

○月色

りて來るところの源の意なり。
○元 事柄の始めを云ふ。本元など。
○舊 前方といふ意、俗にいふ、ツット以前にこのことなり。
○固 もとよりと訓ずるものにして、外のものとは

冬の月は、瑠璃のごとくにして、まことに能く牙之渡れり。
三日月の頃より待ちし、今宵の月のとやけさは、稀に見るととを得れども、又甚だめづらしと云ふべし。
月、東山の頂をはなるれば、影は、清流に落ちて、忽ち銀波を漾はす。
残月西に傾きて、山の端、やうやく暗く東天に微紅を漏らすに至れり。
皓々たる清流の月は、小波にうつりて、白銀を碎きて

其の意義異なり。前によりといふ意義なり。
○素 もと又も
とよりとも訓ず。もとといへば其の本質といふ意。
○本 どだい、おほもとなどいへる意を含めり。
○最 多くの中に於いて、第一番

流したるが如し。
悠々たる素月、天に流れて、漣漪に濯ぐ。
松月の明月、方に圓にして、雙龍の珠を争ふがごとし。
落日は、銀盆のごとくにて大なり。
白露、空に満ちて、月團々たり。
月高くして河影ますます淡し。
利鎌のごとき三日月は、凄きものなり。
枯野を來で見れば、月は、隈なく照らして晝の如し。
月は、破窓を照して、四顧既に寂寞なり。

といふこと。又勝れたるものといふ場合にも用ふるなり。
○尤 ことに、
ともいふべき意を含めるなり。
△せ
○攻 多くは戦争のとき攻むるに用ふ。然れども又、人の罪過などを咎

○星
頭を回らせば、天空遙に星斗の爛漫たるを見る。
一道の銀河は、怡も白銀を散布したるが如くに見ゆるものなり。
烈宿の光を收めしは、明月の皓々たるに奪はれたるものなり。
天暗しといへども、雲間より燦爛として光れるは、星斗たるを知る。
奔星電馳して野溪に落つるを見る。

むる場合にも用ふるなり。
○責 人の罪過あるものをば、問ひ糺すに用ふるものなり。
○譴 言葉を以て過誤などを叱りつくることなり。
△す
○救 人を助け、安然の地位に

在らしむることなり。
○援 引き寄せて助くること。
○拯 艱難なる事柄に取りかこまれたるをば、助け出すなどに用ふ。
○濟 越え難き場所などをば、助けて渡らしむる意を含めり。

東天將に紅を呈せんとして、片雲の曙斗にかゝれるあり。

四望暗々の中にありと雖も、雲間の聚星、炳焉として光輝を放つ。

光芒長か引くものは、彗星にして、稀に見るところのものなり。

○雷電

紫電閃々として、人目を射るを以て、敢て仰視すること能はず。

霹靂一聲、迅雷耳を被ふに違わらず。

一抹の黒雲は、紫電を吐き、雷鳴を起すものなり。

轟々般々として、聲、天地に震ふ。

電氣閃々として、空中に曳き、雷聲轟々として、耳を破れんばかりなり。

杉の大樹は、梢より割裂して、其の勢の凄然たる様を現出す。

煌々閃々として、暗夜をして乍ち白晝たらしめ、乍ち暗黒たらしむ。

暗黒たらしむ。

○則 上の事を
受けて、下に續く
ときに用ふるもの
にして例へば斯の
ごとくすれば則ち
斯くの如し、など
の類。
○即 取りも直
さずといふ意、即
今の義を有する字
なり。
○乃 そこ、て

或ひは遠く、或ひは近く、歌々として將に墜ちんとす
るが如し。
暴雷飄忽として震蕩し、高物皆將に粉碎せられんとす。
千百の激雷一時に空中に轟くがごとく、其の壯絶悽絶、
比喩するに物なし。

第三編 地理門

○江海

柳陰方に暗く、炎熱至らず、一竿を携へて、江頭に歩
す。

といふ意を含めり
それより我は所思
を充分に明らかに
せんとする場合に
應用せらるゝもの
なり
○載 多くは普
通に用ひらるゝこ
と、極めて稀なり。
其の意は、漸次に
前の方へ進行する
ことを含めり。

水ありて潺湲、以て涼を納るゝに足る。
舟を松下に繋ぎて、月の丁るを待つ。
豫め遊某を備ひ、客を乗せて、中流に浮ばんとす。
一葦の如く所を縦にし、萬頃の茫然たるを凌ぐ。
砂磧一望、流水淙淙。
碧蘆風にそよぎて、岸に躍るがごとく、白鷺佇立して
考ふる體を装ふ。
月、波心に湧きて、矚目更に新なり。
前洲につなぎて望めば、碧流清く、波起ることなし。

○酒すけ 乃に同じ。
 ○輒すなはち いつにて
 も斯くのごとき事
 あり。其の度ごと
 に、といふ意を合
 めり。
 ○便すなはち 粗即はなの字
 に同じといへども、
 即は、道接ちやくせつにとい
 ふ意を含めり。便
 は、時の上に於い
 て急に手早くとい

風止みて、波静なり。
 一片の扁舟、去留に任す。
 風帆は、煙波の間に出没す。

○山嶽

翠巒重疊として、眼界新なり。
 山又山を踰ゆれば、又、山あり、其の盡くる所を知ら
 ず。思ふに東海の濱に至りて、海に没せるか。
 芙蓉八朶の峰は、遙に眺望すれば、美人の輕羅を纏ひ、
 霞の帯をまとひたるが如く、近づきて其の土を踏む

ふ意なり。
○住 居る場所
を定め居ることな
り。
○棲 動物の巢
に居ることなど。
栖の字も亦これに
同じ。

ときは、突兀たる巉岩崎嶇として錯落し、其の状の名状すべからざるものあり。

翩然として獨り往き、泉石の上に逍遙するときは、密氣、肌に迫りて、三伏の炎中に在るを忘るゝに似たり。

斷崖絶壁に、天工の加へし斧鑿の痕あるを見る。

萬壑環注、概して大溪をなし、更に一大溪水を注入して、某河に湖す。

溪に沿ひ、透迤として蛇行す。

文辭修飾の例

○雁がねの聲の、
砧をさそうにやあ
らん。砧の音の、
雁がねにかよふに
やあらん。
○花をまつ梅が枝
に、寒けき風ふく
たひ、久方の月は、
清めるを、夜半の

断崖の上に棧橋を架し、以て遊賞者の便に供す。

俯瞰すれば、群山皆蟻螻の如し。

脚下忽ち溪水の瀟々たるを聞くのみ。

満山蒼翠、蔚然として深考し、金風瑟瑟、琴を鼓する

が如し。

嶮を攀ち、阻を踏み、遂に山頂に達す。

深く山に入れば、歸雲蓬勃、人を載せて去らんとす。

巉岩怪石、臥虎跳龍の勢あり。

層巒翠を聳かし、嵐色、人を掠む。

時 令 門 (九〇一)

浮雲、たちかくす
ためにしやあらん。
○塵の世のけがし
きなのがれて、か
やが軒、松の扉に、
心の月をすましめ、
花をつむ夕、關伽
をくむ、曉、御佛に
つかふる暇ある時
は、氷を碎き雪を
煮て、搦の尾の昔
をものびけり。

○鸚鵡石の記

庚戌の歳、四月十七日、駒野を發して、小萩を過ぎ
脇山村に至る。行くこと二里ばかりにして。中村と
いふ地に至るに、山川紛糾なり。そこに世に云ふ鸚
鵡石といふものあり。山の半腹に頽然たり。路迂に
して究く、攀ちのぼりつゝ、且つ望み、且つゆく程
に三四町にて、其の石の下に至る。これを觀るに高
さ十四丈、潤二十丈ばかり、西北の方は、草莽、根
をおほへど、喬木はなし。其の右へ相距ること、百

〇錦きて、晝ゆく
心地して、故郷に
かゝりける。
〇字を知らずして、
字をうつし、圖に
よらずして、書を
かくものは、楫な
くして、舟をやり、
鞭なくして、馬に
のるが如し。
〇その智には及ぶ
べく、その愚には

餘歩にして、巖あり。其の上は、數人を坐すべきは
どのひろさなれば、同行のもの、こゝに居て、物い
ひ、或ひは歌うたひ、又は鼓うちなどす。兩石の間
にや、平なるところあり。甍毬をしき、坐して聽
くに、所、聲に應じて、或ひは人言をなし、或ひは
歌うたひ、又は鼓をうつ、其の輕重舒疾、一として
差ふことなし、但、幔を隔て、ものいふがごとく、
其の聲、左の角にあり、意ふに、虚中物を受くるこ
と、鏡の影をうつすがごとくならん。たゞ、笛の聲

及びがたし。
〇草むらの螢は、
遠く眞木の島のか
ゞり火にまがひ、
曉の雨は、おの
づから、木の葉ふ
く風に似たり。
〇程朱の道にした
がひて、鄒魯の風
を尋ね、韓歐か文
を好みて、邯鄲の
夢をまなぶにぞ、

のみは應ぜず。是は、律に協はざるにてもあるにや。
昔は、草木生ひしげりて、此の石あることを、人も
知らざりしが、四五十年前、樵人の、木を伐る聲
のひびきけるを、始めは、これを怪み懼れて、逃げ
走るもありしに、後には、聞き馴れて、遂に名ある
石にぞなりしと云ふ

〇菅笠日記

十日、けふは、吉野をたつ。昨日かへるさに、如意
輪寺に詣つべかりけるを、日暮れて、のこしあさし

老のねざめも、なぐさみぬる。
 ○文屋の康秀は、詞はたくみにて、そのさまみもおよばず、いはゞ、買人のよき衣、着たらんがごとし。
 ○世のうつりかはる有様を見るに、榮枯盛衰、互に行きかふをば、夢と

かば、今朝ことさらに詣づ。此の寺は、勝手の社の森より、谷へおりて、むかひの山なり。谷川の橋をわたりて、入りもて行く道、櫻多し。寺は、山の腹に、いと物ふりて立てる堂の傍に寶藏あり。藏王權現の御像を据ゑたり。此の御厨子の扉の内なる繪は、巨勢長岡が畫けるといふを見るに、實に、いと古く見所あるものなりけり。それに、後醍醐の帝の、御みづから此の繪の心をつくりて、書かせたまへる御詩とておしたり。脇に、この帝の御像もおはしま

やいはん、現とやいはん。誠に富貴は、浮べる雲のごとく、禍福は、あざなへる細のごとしといへるに、何かたがふことあるべき。
 ○春は、藤波をみる、紫雲のごとくにして、西方にむかふ。

す。是れ、はた、御手づから刻ませ給へりとぞ。其の外、書かせたまへるもの、又、御手ならし給ひし御硯や、なにやと、とうで、見せたり。又楠の正行が、軍に出で立つとき、矢の先して塔の扉に「かへらじとかねて思へば梓弓、なきかずにいる名をぞとむる」といふ歌を彫り置きたるも、此の藏にのこれり。帝の御爲めに、まめやかなる人なりければ、かの義經などは、やうかはりて、あはれと見る。又、塔尾の御陵と申して、此の堂の後の山へ、少し

○今こかねの聲、
たちまちやみて、
玉のひゞき再び、
きこえずなりぬる
は、わがとちのな
げきのみかは。
○諸君のごときは、
春秋にとみ、材力
にたる。もし怠ら
ずして、月に日に
進まば、何ぞ古人
に及ばざるべき。

のぼりて、木深き蔭に、かの帝の御陵のあるに詣で
見奉れば、小高く築きたる岡の木ども、生ひ茂り
つくりめぐらしたる石の御垣も、かたへにうちゆが
み、欠けそこなはれなど、さびしく物あはれなると
ころなり。そのかみ、新待賢門院のまうでさせたま
ひて、『九重の雲のうてなも、夢なれや、苦の下に
し、君を思へば』とよませたまへる御歌などおもひ
出てたてまつりて、

苔の露、かゝる深山のしたにても、

○花に鳴く鶯、水
にすむ蛙の聲をき
けば、いさとし生
けるもの、いづれ
か歌をよまざりけ
る。
○愛着の道、その
根ふかく、源とほ
し。
○堅き氷は、霜を
ふむより至るなら
ひなれば、亂臣賊

玉のうてなはわすれしもせじ
と思ひやり奉るも、いとかしこし。

○海道の記事

江尻の浦を過ぐれば、青苔石に帯び、黒布いそには
る。南は澳の海、森々として波をわかして、孤帆天
にとび、北は、茂松、鬱々と枝たれて、一道つかを
なす。漁夫の網をひく身を助けんとして、身をくる
しめ、遊魚の釣をのむ、命ををしみて、命をほろぼ
す、人いくばくの利をか得たる、魚いくばくの餌を

料資の文美 (六一)

子といふものは、
ほのはじめ、心、
言葉をつゝしまさ
るよりいで来るな
り。
○行く川の水は、
たえずして、而も、
本の水にあらず。
よごみに浮ぶ、う
たかたは、かつ消
え、かつ結びて、
久しくとゞまるこ

かもとむる、世をはしる思ひ、命をかばふ志、か
れも、これもともに同じ。これのみかは、山にあせ
かく樵夫は、北風をとなひて、夕にかへり、野に足
なえる商客は、白露をはらふて、あかつきに出づ。
面々のたしなみ、まぢくなりといへども、各々の
くるしみは、みなこれ、渡世の一事なり。

人ごとにはしる心はかはれども、

世をすぐる道はひとつなりけり

此の浦をはるかに見渡しゆけば、海松は、なみの

(七一) 門 文 天

となきなり
○器は、入るゝものをして、おのが方圓にしたがはしむ。
○世の中の衰ふるといふは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色も改まるにもあらず、人の心の悪くなりゆくを、末世とは

岩根に、根をはなれたる草、海月は、潮の上に、水にうつるかけ、ともにこれ浮世を論じて、人を戒めたり。

浪の上にたゞよふうみの月もまた

うかれゆくとぞ我を見るらん

清見が關を見れば、西南は、天と海と、高低ひとつに眼をまどはし、東北は、山といそと、嶮難おなじく、足をつまだつ。磐の下には波の花、風にひらく、春の定めなく、岸の上には、松のいろ、みどりをふ

料資の文美 (八一)

いへるにや。
○名と器とは、人にかさずといふ。天のつかさに、人それかはるともいひて、君のみだりにたすくるを、謬舉とし、臣のみだりに受くるを尸祿とす。謬舉と尸祿とは、國家のやぶる、階、王業の久

くみて、秋をおそれず、浮天の浪は、雲を汀にて、月のみふね、夜いでしこぎ、沉陸の磯は、磐を道にして風の使脚、あしたにふきてすぐ。名を得たる所、必ずしも鼻を得ず。耳にふける所、必ずしも目にふけらず、耳目の感、ふたつながら得るは、このうらにあり。浪にはらひてぬれく、屋にみちをとへば、松風むなしくこたふ。岸柳にくるしみをたづぬれば、撞花變じて石あり。關屋の邊に布だみといふ所あり。昔、關守の布をとりたるが、つもりて、石にな

(九一) 門 文 天

しからざる基なり
○月に對し、むかしをしのびては、さながら、古人の面影もうつる様におぼえ、月は、物いはねども、語るやうにもおぼえ、忘れては、昔の事を問はまほしく思ふぞかし。
○長き日も夕にな

りたるといへり。

ふきよせのきよみ浦風わすれがひ

ひろふなごりのなにしねはゞや

かはらばやけふみるばかり清見がた

おほはじそてにかゝるなみだちは

海老は、なみにおよぎ、愚老は、浪にたゞよふも、老いて腰かゝまる。汝はしるや、生涯うかゞる命、今いくほど、我はしらず、幻中の一瞬の身。かくて、おきつの浦をすぐれば、しほがまのけふりかす

りぬ、水鷄くもなのこと
くくと、たしくに
促うながされて
〇景けいにより、情じやうお
こり、情を以て、
景をおもふ。脆もろき
は人の心なるかな。
〇筒井つづいの蛙かはづの海原うみはら
をしらず、夏の虫、
冬の氷をうたがふ
にたどへん。
〇いくばくもあら

かに、浦人の袖うちしほれ、邊宅へんたくには、小魚こぎよをさら
して、屋上にうくるずをふけり。松のむら立、なみ
の見ゆる色、心なきこゝにも、心あらん人に見せま
ほしくて、

たゞぬらせゆくての神にかゝる波

ひるまのほどはうら風もふく

細崎こさいといふ所は、風瓢かぜひやう々とひるがへりて、砂をまは
し、波浪なみ々とみだれて、人をしきる。行客かうかくこゝにた
づさはりて、しばらく、よせひく波をうかゞひて、

ぬ命いのちに、萬よろづのたか
らも、何にかせん、
身の後に、黄金こがねを
して、北斗をさし
ふとも、人の爲め
にぞ、煩わづらはるべき
ひし人もありき。
〇五日に一たび風
ふき、十日に一た
び雨ふるといふ。
聖ひじりの御代みよのために
しぞいふめる。

いそぎとほる、ひだりは、嶮岳けんがくの下を岩のはさまと
をしのぎゆく。右は、かすかなる波の上をのぞめば、
眼まなこうけぬべし。はるくくとゆくほどに、大和多のう
らにきたりて、小船こぶねの沖中おきなにたゞよへるを見る。飄
帆かぜとんで、萬里風便ばんりふうべんをたのみて、白煙しろけむりに入り、秋波
うごきて、千雲夕陽せんぐんせきやうをあらひて、紅藍かうらんに染そむ。海館うみくわん
のうち、此所をとめて、身をばとゞめず。

わすれまじな波のおもかけ立そひて

すぐるなごりのおほわたの浦

○詞を綾なせるさま極めて美しく、
数々の珠をつらねたるがごとく、始終つらぬき通りて、亂れたるふしもなく、結ばほれたる所もあらず。
○桑の枝は、小なるより押へよ。長大となれば、押へてもかゝまらず。

○おのれはつめいなりとも、包みかくして人の發明を常の鑑として、身をまもるべきものなり。
○食ををしみて、くさりそこぬるまで、貯へおくものあり。こは鼯鼠に類せる人なり。
○瀟湘の八つのな

湯居の宿をたちて、はるかにゆけば、千本の松原といふところあり。老のまなこは、極浦のなみにしほれ、臙なる耳は、長松の風にはらふ。晴の天の雨には、翠蓋の笠あれば、袖をたぐらず。砂濱の水には、白花ちれども、風をうらみず。ゆくゆくあとをかへりみれば、前途いよくゆるし。

きゝわびぬらとの松原ふく風の

ひとかたならずわれしをるこそ

蒲原の宿にとまりぬ、すがごものうへにふせり。

○港灣

深く陸地に彎入して、山は、之を包み、内、自から鏡のごとし。

一碧の大地を見るがごとく、いづれに其の入口ありや、見るべからず。

地頭長く突き出で、内外の海を扼したりければ、突堤、築きたるがごとくにして、灣内甚だ深く、大船巨舶を碇泊するに足るものなり。

東洋第一の大港にして、灣内水深く、大船巨舶數十隻

がめ、南湖の十の鏡も涼風一味の中におもひためたり
 ○他の手にあるものをほしがるものあり是は鶯に類せる人なり。
 ○山は、芝生にして高からず、小松が下に臥したる鹿の、いかなる夢かみるらん。

○御國は、暑さ寒さの理よく、山のすがた水のけはひさへ、たぐひなく美しさに、あえて人の情もやさしくみやびやかなり。
 ○庭の櫻も、やうく、さかりなるに、鶯さへ友をもとめて鳴きわたるめれ。

を容るゝに餘あり。

此の地の斯くの如く般賑を來す所以のものは、彼の大港灣の賜といふべし。

遊艇を灣内に浮べて漕ぎ回るときは、四圍の山々は、翠色を滴らし、其の風光の明媚なる、極めて當すべき致あり。

灣口に横たはれる一大岩石は、大風を凌ぐに足らずとすことも、聊か以て、波浪の危険を防止する足る。

○街衢

兩側の大夏高樓は、天の摩して聳立し、道路は、悉く白聖を塗りて、恰も粉壁の如く、些の塵芥をも留めざるなり。

街巷は、左まで清潔ならずといへども、蒲洒たる風趣は、愛するに足る。

若し此の市街をして、某地の如くならしむれば、更に一段の趣味を添ふべし。

由來此の地は、四通八達の要衝に當り、人馬絡驛、物貨集散し、頗る般賑を極む。

○吉野の雲、龍田の錦は、伯仲の間にあるべし。
○飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれども、時うつり、事去り、樂しみ、悲しみ、ゆきかひて、花やかなりしあたりも、人すまぬ野らとなる。變らぬ住居は、人改まり

夜間のごときは、肩摩鼓撃、極めて雜踏をなすもの、實に此の市の特有なり。

此の街衢は、一千有餘年來の舊市にして、歴史上に名を歐揚したり。

某港に接して、交通頻繁、商業頗る活潑なれば、其の般賑なること、實に比喩するに物なし。

大厦高樓、連櫺櫺比、秩序整然として體裁甚だ佳なり。

○岬崎

怪しき岩根の長くつゞきて、遠く海中に突き出たり。

桃李物いはね 誰とらに昔を語らん。
○日月迭々うつりて、白駒の隙すぎやすく、衰病日に侵して、黄金の術なりがたし。
○風のさとと吹き入るゝに、花の香も、まろうどの香も、橘ならねど、昔、

白砂青松を彩りたる岬の遠く突き出で、其の岬頭に

一の小祠あり。

恰も長蛇の蜿蜒として海中に浮遊するがごとく、一大

奇觀を極む。

岬頭は、巖岩突兀として、白浪に噛まれ、潮流渦をなして、其の音轟々たり。

願れば某岬は、長く海中に突出し、灣港の口を扼し殆

ど相接せんとするが如し。

岬頭の潮流は、常に奔騰して、激浪、天に接して躍る

料資の文美 (八二一)

おもひ出でらるゝ
女房なり。
○花をまつ梅が枝
に寒けき風ふくた
び、久方の月は、
清めるを、夜半の
浮雲、たちかくす
ためしにやあらん。
○折しも五月雨い
たくふりつゞき
て、いとゞ哀れを
そへしが、月日へ

がごとく、附近に於いて、見るべからざる光景を呈
せり。

岩頭に横たはれる一大奇松は、實に名状すべからざる
を以て、航海者は、常に之を目標として、危険を避
くるなりといふ。

白浪躍りて怪岩を噛み、碎けては珠玉を飛ばすは、某
崎の光景なり。

○波浪

波ことに穩にして、前山は、影を倒に映、水中に緑

(九二一) 門 文 天

て空は、はれぬれ
ど、涙の袖は、か
はきたにせず。
○汀の草に、紅葉
のちりとゞまりて、
霜いと白うおける
朝、やり水より煙
のたつこそをせし
けれ。
○園の楡の本の上
に、蟬の露をのま
んとするなり。後

の色を流し、閑鷗は、波に浴して、盃を尋ぐべきに
似たりけり。

碧蘆は、風に戦ぎ、白鷺は閑立す。

波浪洶湧、舟將に覆らんとす。

怒濤天に朝し、千萬の白馬、雪を蹴つて奔騰するが如
し。

白砂青松、波うち際にありて、磯ふく風に洗はるゝな
ど、いと面白し。

水静にして月は、波心に湧き出でぬ。

に蟪蛄の犯さ
するをしらず。蟪蛄もまた蟬をのみまもりて、後に黄雀の犯さんとするを知らず。黄雀また、蟪蛄のみまもりて、木の下に弓をひきて、童子の犯さんとするをしらず。童子も亦、前に溪谷、後に堀

銀濤天空を打ちて、壯絶言はん方なし。
一片の短艇は、怒濤に翻弄せられ、覆没せんとするこ
と幾度もありきといへども、操縦に巧みなりければ、
よく切つて、彼岸に達しぬ。
浪は、天を吐吞して、光景甚だ雄大なり。

○郊野

群芳は、鼻を撲ち、璀璨は、目を奪ふ。是れ春景の郊野なり。
松風さけべる冬の野も、いつしか春めきへ、青々と草

あることをしらすして身をあやまてるなり。
○明月の玉にも、さずなきこと能はずあやまちなき人、なんぞ今の世にあらんや。
○人の心の花の、折ふしにつけて、うつりゆくを、いかゞはせん。

の崩え出づるも心地よし。
青波緑浪は、平野の景致を添へ、黄金色せる菜の畠も亦波を漂はすが如し。
小川の水の澄みて、小魚などのちらりと泳げるあるに、紅葉の二つ三つ流るゝなど、まことに愛するの風情ぞかし。
稻刈る人の、此處につくばうなど、せは太平のさまを示しぬ。
秋の野に照る月の、露は、玉をつらぬけるがごとく、

○耳に鳴彈の音を
きかず、目に旗手
の靡きをも見ぬ、
御時世にあいて
は、何事につけて
も、憂しとわびし
とうらみかこつべ
き事やはある。
○五月雨に四時の
ごとく、雨のさま、
いろいろに降りけ
るゆゑ、春雨のさ

すだく蟲の音のいとあはれにきこゆれ。
枯野のけしきは、また格別にて、芒の風にぞよげる、
黄ばみたる、紅なる木々の葉の、ちら／＼と飛びか
ふなど、見るから物寂しき心地ぞせらるゝ。
小川に釣する人々のさま、實にや、書に描かまへほし
き様にぞありける。

第四編 人事門

○旅行

九折なる麓路の、木立ふかきほとゝに、白屋かりて、

びしきにくらべ、
夏の夕立にたど
へ、秋の雨のもの
すごきにかこら、
冬の雨の寒きにも
たとへたり。
○庭のよもぎふ、
露ふかく、松の落
葉、軒をうづむ。
落花ひなしく地に
しき、風狂して梢
をならす。唯、涙

燈火のかけ濡れしかば、其處にたちよりて、行きく
らしたる由をつけて宿りを求めぬ。
茫々たる郊原にて、小徑にまじる枯花の、招くより外
は、宿を貸すべき家とてはなかりけり。
峰高くして、路ほそく、山けはしうして、苔滑なり。
後は山、前は磯、岸うつ浪は、漉々として音幽に、松
吹く風は、蕭々として物寂し。
都をば、霞とゝもに立ち出で、しばし程ふる秋風の
れと、白河の關路より、また立ちかへる旅衣、浦山

料資の文美 (四三一)

は、落つるとも覺えぬに、袖もところせくなりけり。
○萩、女郎花やらほころびて、花咲きたるが、露にぬれながら、打ちゑみたる。心なき草木まで、行幸をまちよろこべるにやと思はれて、

人 事 門 (五三一)

いとおもしろし。
○夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる、蛙の物待顔に、空うちならみて、ふつゝかなる音に、鳴くもいとをかし。
○山重なり、谷へだゝりて、谷隔りて、世の中のあり

すぎて美濃の國、野上の里に着きにけり。

今をばじめの旅衣、日も行くすゑぞひさしき。旅衣、

はるくの都路を、けふ思ひたつ浦の浪、舟路のど

けき春風も、いく日來ぬらん跡未も、いざ白雲のは

るくと、さしも思ひし播磨瀨、高砂の浦に着きに

けり。

いづことも定めぬ旅を信濃や、月と共寝の夢ばかり、

名残を忍ぶ故郷の、淺間のけぶり立ちまよふ、峯の

枕の夜寒なる、旅寝の床の夢さ涙。

日に向ふ、國の浦舟漕ぎ出でし、八重の潮路をはる

くと、分けし浪の淡路瀨、かよふ千鳥の聲き、

て、旅を寝ざめを須摩のうら、關の戸ともに明け暮

れて、阿漕が浦に着きにけり。

一日も、千秋をふる郷の空なつかしく、いと暮はし

きことゞもなり。

行くやいづち雲水の、跡をしたひていづことも、知ら

ぬ道にぞ出てにける。

あま小舟、こぎゆく方を見せしとや、浪にたちそふ浦

さまをもしらず。
衣は、蝦夷がきる
あつしてふもの、
如くにて、身をも
かくしあへず、く
ひ物は、稗のみに
て、米麥の味をい
かなるものともし
らぬは、誠に憐む
べき限りなれば、
いかゞは、これを
すめらぎの御民と

のあさざり。
高嶺にのこる天雲の、かくるゝ空も、うきたびの、何
に心のいそがれん。

○火災

折ふし辰巳の風、はげしく吹きて、乾をさして燃えひ
ろがりぬ。
いと、人の心をなやますことは、すぐれてあぢきなく
ぞ侍るべき。

大抵は、焼野の原となりしかば、さこそを哀に思しけめ、

いふべき。
○今年も、はや、
半過ぎぬれば、い
つしが秋のけしき
たちて、萩ふく風
も、身にしをころ
なり。
○佛の教には、左
の方に父を荷ひ、
右の方に母を荷ひ
て毎日に須彌山を
めぐるとも、此の

乾の風はげしくて、黒煙天を蔽ひ、大衆は、猛火に責
められ、炎にむせびければ、之に堪へがたくやあり
けん、蜘蛛の子をちらすごとく落ちゆきけり。

風はげしく吹きて、静ならざりける夜、いぬの時ばかり、
都の巽より、火いで來たりて、いぬゐに至る。

はてには朱雀門、太極殿、大學寮などまでも移りて、
一夜のほどに應芥となりけり。

炎々天を焦して、黒炎は渦まき、人々の逃げまよふさ
まなど、實に、物の哀をこゝに留めたりきといふべ

恩は、なほ、むく
いがたかるべし
と、説きたまへり。
○孔子の教には、
身體髪膚は、父母
にうけたり。敢て
毀らざるを、孝の
始めとすと説さま
へり。
○世の中の、人の
多き中にも、唯、
多口にして、能く

きか。

○別離

夫婦親子のわかれ霜、八千八聲の鳥ならで、なきあか
すとも、露しらず、あそび疲れて、餘念なき寝顔を
見れば、なかくくに、子を思ふくるしさは、淵川よ
りもなほ深く、夫に別るゝ悲しさは、嵯峨野の奥の
鹿よりも、なほやるせなく侍れど、何事も、忠義に
思ひかへて侍るかし。
實にや、悲しきは、死して別るゝいまはより、生き別

手足を動かすもの
あり。そは、きり
くすや、みそさ
しいに類せる人な
り。
○食を見るごと
に、くはまほしが
るものあり、こは、
蠅に類せる人な
り。
○田中の寺は、杉
の一むらにかくれ

るゝこそなほ悲しけれ。

瀬をせけば、淵となりても、よどみけり、別れをとむ
る、しがらみぞなき。

打ちよする波はかへれど、歸らぬ人を思ひわぶる、數
行の涙や、實にやる瀬ぞなかりける。

送離累別の袂、いつれのとくに及んでか。乾すことを
得ん。たれとゝもにか、日を語り終らんか。ねもへ
ば悲しくも哀なりけるは此の身にてぞありける。

○窮境

て、岸にそふ、民家は、竹のかこみのみどり深し。
○綱引するあまが呼聲、白帆はれる舟人が、棹の歌、すべて鴈を洗ふ佳境なり。
○高位にのぼり、富有ならんには、人をめぐみ、行を正し、大徳を積み

夜は、静なれば、窓の月に古人を忍び、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は、遠と真木島の盛にまがひ、あかつきの雨は、ちのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくと鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、峰のかぜきの、近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程をしる。
昔は、芙蓉の花たる身なれども、今は、藜藿の草となる。
金殿玉樓に、風にだも觸れたまはざりし身の、今は月

て子孫の幸福の種を蒔くべし。さあらぬときは、墳墓の地のあれゆきて、まつる人もなきまでになよぶべきか。
○世は、海なり、身は舟なり、志は、梶なり。梶をあしく取れば、行くべき方にゆかず。風

もる賤が伏家に、いぶせくも日を送るあはれさ。
海松の如き衣をまとひて、垢にそみし肌の、見るも、いと汚らはし。
一たび斯る窮境に陥りしといへども、時を得るときは、やがて上達けしつらん。
紋龍の雲を得ざるは池中に、潜める故にやあらんかし。若し一たび雲を得れば、思ふに池中のものならざるべし。
昔の金殿玉樓にひきかへて、うきふししげき竹たるき、

波にあへば、舟く
つがへるがごと
く、志の持ちやう
肝要なり。あしく
志をもてば、身を
くつがへす。梶の
とり様あしくて、
舟を覆すが如し。
○古き文をつらつ
らに考ふれば、そ
の則は知らるべ
し、則なければ、

涙隙なき松のかき、一夜をへだつ程も、たへしのぶ
べき心ならず。

○哀傷

心なき草木も、愁ひたる色をぞあらはしけるは、涙の
種なりけり。

浅からぬ別れの涙、ちしほの紅よりも、尙ほ其の色や、

深し。

有爲無常の習、生者必滅の掟、始めておどろくべきに
あらねども、一天暮れて、日月の光をうしなへるが

蜻といふものゝ、
本末わちがたき
に準ふべし。
○女子、やがて背
より抱くに、驚く
けしきもなく、念
誦、氣平なるさま、
なほ、蟬の樹を
撼すがごとく、蚊、
子鐵牛をかむがご
とし。
○古の歌は、例へ

ごとく、萬人歎きて父母の喪に逢ふにもいや増した
り。

あな悲しき、いみじやと、そこにふしまろびて、前後
も知らず。

あさましく心憂く、夢のやうなることにもあるかと、
盡きもせずおもほしげなる。

情なく道の邊の寺の中にして、練衣を御頸にひきま
ひつゝ、遂にはかなくなし奉りぬ。是は、物のあはれ
を知らぬ草木までも、色かはじ、情なき獸さへも、

ば書師ならぬ人の、堪能なるが、用あるとき、ものにまかせて、かけるが如し。後世の歌は、繪師のかけるが如し。好けれども、心より起れば、稀なり。

○賤しき身にて、一代の風教を維持せんとするも、わ

涙を流せるがごとく思はるゝなり。

老少不定、生者必滅は、世の習とはいへ、まだそらわかき身の、斯くも淺間しく成り果てぬこそ實に哀の極なりき。

哀に悲しきこと譬へんに方なし。めでたら照り輝きたる月日の表に、村雲の拂に出て来て、掩ひたるこそ、よく似たれ。

君と別れにし今は、燈火の下に伴ふ影もなく、枕の下には、古さ慕ふ涙のみを積りたりけるは、哀の極なり

りかし。

○壽賀

古來七十歳の長壽を得られしは、中々に多からず。古稀と云へるも、實に道理とこそ聞えけれ。

年は、還暦を過ぎつれども、壯者も及ばぬ健康は、其の因なくてやは。

米字の年に達したりといへども、未だ病といふことを知らず。

壽筵を張りて、いさゝか高齢の祝ひ事を成さんかとして、

が力およぶべきにあらねば、ひとへに虻蜂の樹を撼かさんとし、精衛が、海を埋めんとするに似たり

○大伴の黒主は、そのさま、いやし。薪おへる人の、花の陰にやすめるが如し。

○宇治山の僧喜撰

は、詞かすかにして、首尾たしかならず。いはゞ、秋の月を見るに、曉の雲にあへるがごとし。
○文の林世々におとろへ、言の葉の道、日々にくだりゆきけるを、加茂の翁、世に出て、今をすて、古に

用意もとりなりき。
人、誰か富貴を希はざらん、誰か、長壽を好まざらん、之を希ひ、これを望みて得ざるものは、其の本を忘るゝに因る。

斯る高齡に達したりといへども、眼には眼鏡を用ひず、齒は壯者をも凌ぐべく、脚は、一日よく十數里を歩みても、未だ疲勞することを見ず。

どうぞ、君のごとき高齡にあやかたきものぞかし。一家、三組の夫婦ありて、家族は、すべて三十有餘人

かへり、青雲の高き心しらひを求めしづはたの紋あるみやびごとを尊びき。
○昔から、人いへることあり。君と一夜、ものがたりせば、十年書をよむにまさらんといへり。
○愛着の道、その

とぞ聞えしは、まことにめでたき限とこそ謂ふべけれ。

一門すべて數十人に及び、最長齡者はすでに九十の坂を踰え、幼者は、今年十二歳とぞ聞えし。

人生何事か樂しかるやと問はゞ、無病長壽に過ぐるはなからん。

○仁慈

仁心だにあらば、眼の前に、人々の飢寒凍えぬるを、助くるほどの恵は、いと行ひやすかるべし。况んや、

根深く、源とほし。
○長歌の勢は、風雲にのりて、みそらゆく、龍のごとく、詞は、大海の原に、八百潮の湧くがごとし。
○言の葉けだかく、句さへ添ひたるな、んいと人の心をうごかさしむ。
○必ず、禁戒をま

富貴厚祿の人は、多くの人の飢を助くること、いと易きことになん侍りける。
人間、世の樂みは、みづから善をたのしみ、人をすくひて、善を行ふに踰えたる樂しみは之なかるべし。
奢りて、益なきことに、多くの財をつひやすは、甚だ賤しむべきことにぞある。
富める人のれごりて、一日一事についやせる財を用ひるは、千萬人の飢をたすくるにも猶ほ餘りあるべきか。

もるとしなけれど、境界なければ、何につけてかやぶらん。
○真心のまゝを、うるはしき詞もてつゝけんは、天にそむかず、人にそむかずといはんかと思はる。
○かゝる昇平文明の盛代に生れて、

世の中に同じ、く人と生れて、飢ゑこゝえる人甚だ多し。其の不幸はあはれむべし。わが身餘財あらば、かゝる貧人に施して、みづから樂しみ、又、人をも樂しましむることに心すべし。

○變遷

昨日までは、車馬絡驛、肩摩穀擊の地も、今日は、はや寂寥として、又願るものなきに至れり。
宇宙の四時かるがごとく、又萬物に生死あるがごとき、皆しかりとす。

百年を春臺しゅんたいに送るは、人の常なり。○人の目は、百里の遠きを見れども其の背を見ず、明鏡といへども、その裏を照さず、離婁の明目なるも、そのまつげを見ることなし。○鸚鵡おうひよく物いへ、ども飛鳥ひてうをはなれ

桑田さうでん變じて、蒼海そうかいとなる。疇昔ちゆうせきは、東洋に覇はを振ふるいて、跋扈ぼくこ跳梁しやうりやう、以て自から倨こ傲尊大を極めたりし暴國ぼうこくも、今は、はや既に閉息へいそくして、又如何いかんともすること能はず。其の末路まつろ怪むべからずや。天時てんじの變は、如何ともすべからず、人為じんゐの變は、これを防ぐことを得べしといへども、車輪しやりんの急坂きゅうはんを轉下てんかするがごとく、非常ひじょうの力を以てするにあらざれば、到底とうてい防止ぼんしすべかられるなり。

ず。狸しやうり々うよく物いへども、獸じゆうをはなれず、人として禮なくんば、禽獸きんじゆうの心ならずや。○苦は、樂の種、樂は、苦の種としるべし。○君子きんしの交は、淡たんしうして水のごとし。小人しやうじんの交は、甘かんうして飴あめの如し。

新陳しんちん代謝たいしやうして今日けふに至れるもの、其の推移すいしゆの狀態じやうたいを回顧こくわすれば、轉かへた感慨かんがいに堪たへざるものなくんばあらず。麗春れいしゆん美花びか、人目を娛たのましめたりといへども、今は、はや其の面影おもかげだも見ることも能はざるにあらずや。時勢じせいの變移へんかするは、恰あたも時針じしんの時々刻々ときときとして止とまざるがごとく、少しも靜止せいしするものにあらず。○水害すいがい家は、流ながれて中流ちゆうりゆうに漾なひ、其の屋上おくじやうに一人の伏ふして、助たすけを呼よぶものあり。

○顔は、人の顔なれども、心は、獸のこゝろなり。
○酒食をすごすは、病を生ずる本なり。言をつ、しまざるは、殃の本なり。思案せざるは、過の本なり。利慾ふかきは、身を殺す本なり。怒をこらへざるは、争の本

遙に悲鳴を濁流の中に聞きしかば、小舟を漕ぎ寄せてこれを尋ねしが、木材にすがれる老婦の、息も絶えんとして、哀れなる姿の見るも涙の種なりき。
濁流滔々として汎濫し、堤防を決潰して、田園を荒蕪になし、頗る惨状を呈す。
人畜の死傷少なからず、實に近古未曾有のことに屬す。其の惨害の激甚なること、驚くの外なし。
百里の沃野は、一望泥海のごとく、樹梢の僅に水面に表現するを見るのみ。

なり。儉終ならざるば、困窮の本なり。この六本たゞざれば、身と家とを保ちがたし。
○虎穴に入らざれば、いづこに虎を得んや。悠々たるものは、つひになすことあらざるべし。
○治まれる御世に

救助船を出して、溺死せんとするものを救ひけるが、水勢激甚にして、船將に覆らんとするに至れり。
刻一刻に水勢を増し、堤塘甚だ危険に覺えしかば、土俵を積み、専ら防禦の術を講ずれども、其の甲斐なきこそ哀なれ。
○震災
將に屋外に遁れ出でんとして、家は傾き倒れ、梁に打たれて壓死するものあり。
骨をくぢき、肉をやぶり、悲鳴號泣、惱亂呻吟する状

生れて、干戈のひ
かしをしらず、安
らいぬ、静に起き
て、嘯さうたひて、
明しくらすことを
よろこび、且つ、
事ありしときに逢
はずして、猛虎も
鼠となり、寶劍も
鈍となることをぞ
いさどほる。
○昔と今と、寒暑

の悲酸なること、想像の及ぶところにあらず。
古來震災を被ること、史上に其の例少なからずといへ
ども、此の度のごときものは、實に其の例あらざる
が如し。
遙に遠雷の轟々たるを聞くと同時に、激震を起し、屋
瓦の飛ぶを見、神悸き、又其の後を知らざるなり。

○競争

社會何事か競争ならざらん。正常なる競争は、人智の
發達を促し。社會を裨補するに足るべし。

のごとくかはれる
さへあるに、冠を
履にはき、履を冠
にきるやうなるこ
とあるこそ不思議
なれ。
○我が行、道理に
かなはじ、世こそ
りて、誹るとも恐
るべからず。わが
行、道理にそむか
ば、世こそりて、

人にして競争心なきものは、應に木偶に等しかるべし。
然れども、其の競争は、最も正々堂々たらざるべか
らず、卑劣野鄙、賤むべきの競争は社會を害し、人
心を腐敗せしむるの基礎となる。
裝飾の義を競ひ、色彩の艶を争ふ。
意匠の高雅優尙を競ひ、技術の奇功を争ひ、互に相下
らず。

工業家は、互に技術を練磨し、専ら清致巧妙なる物を
築出せんことを企及し、以て相互に争ふに至る。

譽るともよるこぶ
べからざるなり。
○悪をなして、福
をねがふは、火に
つきて、冷をもと
め、水に入りて、
暖をもとむるにね
なじ。
○此わたり、晩稻
も、大かた刈りを
さめて、五百町、
千町の田のも、障

吾等は、生存競争の渦中に立つものなり。優勝劣敗の
社会に伍するものなり。
細心以て人に劣らざらんことを期すべし。吾人の執る
べきは、正に此にあり。

○疾病

久しく病の床に呻吟なしつる苦しみの、いかで、之に
比ぶべきものあらんや。
夏過ぎ、秋來ぬれども、病は、なほ去らざりけり。
薬餌を侷むるといへども、嚥下すること能はざるなり。

るものなく打ちは
れ、村々のかまど
の煙、ゆたかにな
びきあひたるは、
まことに沃野千里
とも、たゞへつべ
きところなり。
○儒は、なかば支
那人にして、僧は、
己に、印度人に似
たり。

昔の面影と、今ははや何處にか消え失せて、變りし姿
の哀れなるは、いかに病とはいへ唯、驚くの外はな
かりき。

日夜看護に心を苦しめたる甲斐ありて、今は、病も、
やう／＼に快きに向ひぬるに至りしは、まことに嬉
しき限にこそあれ。

其藥は、口に苦しいへども、病を驅るにはなくては
ならぬものぞかし。

若し少しく癒えたらんには、早く床をはなれて、室内

○對句例

○空にかゝる日月も、誰がためにか明らかなることを恥ぢざらん。心なき草木も、これをかなしみて、花さくことを忘れつべし。

○冬がれの景色こそ、秋には、あさくをとるまじけ

にても歩みたきものありとて、日にく相待ちけることの苦しさは、餘所の見る目もあはれなり。

○芳宜園大人を祭る詞

こゝに文化の五とせ、九月八日、平春海、謹みて芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらをやきて、うなねつきぬ。さて、まをさく、あはれかなしきかも。君は、われに十といひて一とせの兄におはするか、今、そのかみを思ひつるに、君は、まさになさかりの齡におはして、我

れ。みぎはの草にも、紅葉のちりとまじりて、霜いとしろうおける朝、やり水より煙のたつこそおかしけれ。○右をのぞめば、海水ひろく湛えて、眼雲浪にまよひ、左を見れば、長山聳えつらなりて、耳松風に冷え、身

れは、まだ童にてぞはべりける。常に縣居の庭に、物まなびに行きかひたるとき、あしたに参るとては、君のみはかしの後に従ひ、夕にまかるとては、君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、親子兄弟にもなにかことならん。書讀むとては、君を師ともたふとみ、歌つくるとては、われをおもひのつらにぞ教へ給ひける、中ごろにして、君は、つかへの道に暇なくおはし、われは、世のさがにか、つらひて、れのづからうとき方にも過ぎつるを、君、

をそばめて行き、
 足を踏ばて、歩む。
 ○春の花も、匂の
 どけく、秋の紅葉
 も、枝にとどまり、
 いと心のどかなる
 有様なり。
 ○岩のはざまは、
 釣の翁の心も、宿
 しつべく、洞には
 仙人の住むべき便
 あり。谷の簷は、

つかへをしりぞきたまいて後は、われもおなじ街に
 うつりすめば、花をたづぬとは、われ道しるべを
 なし月を思ふとは、君が舟にあひ乗り、憂きこと
 もともに憂ひ、うれしきふしも、共に喜びて、世に
 ありふるわざのまめごと、あだことも、互にへだ
 てなく、心をはせること、今に二十年、その初め
 をくりかへし數ふれば、あひ友たること、既に五十
 年にぞあまりける。さるを、今おくれまつりて、い
 つの世にかあひみん、いづれの時にか、ことゝはん。

巖の花にうつり、
 秋の紅葉は、蜀江
 の錦をあらふ。
 ○春は、藤浪を見
 る、紫雲のごとく
 して、方に匂ふ。
 夏は、時鳥をきき、
 かたらふごとに、
 死出の山路をちぎ
 る。
 ○秋は、ひぐらし
 の聲、耳にみたり、

常なきは、人の身のならひぞと知るも、これをいか
 てか歎かざらん。かゝるを、誰かはよく堪へん、あ
 はれかなしきかも。文の林、世々におどろへ、言の
 葉の道、日々にくだりにけるを、加茂の翁世に出で、
 今をすて、古にかへり、青雲の高き心しらひをも
 とめしつはたの、あやあるみやびごとをたふとみい
 へど、くひせを守り、舟にきだつくるともがら、か
 れに泥み、こゝにひかれて、なほ、あやしみとがむる
 類はおほく、たまあいて、よくうけひく人なん稀な

空蟬の秋をかなし
ぶと聞ゆ。冬は雪
をあはれぶ。つも
り消ゆるさま、罪
障にたゝへつべし。
○花になく、鶯、水
にすむ蛙の聲をき
けば、生きとしい
けるもの、いづれ
か歌をよまざりけ
る。
○花の盛りも、風

りしを、君ひとり心をおこして、あまねくさとし、
廣くいざなひしより、近き人は、まのあたりあひう
づなひ、遠き人は、遙になびきて、古ふりの歌、世
にさかりになりたるは、誠に君の力によりてなり
その、自からよみ出でたまへる歌をみるごとに、古
き調、新しき姿、ともく、に備はらざるはなし。そ
の古をうつせるは、藤原、寧樂の御代に及び、後に
たくみにならへるは、堀河、鳥羽の御時にくだらず。
心に思ふことは、口に盡さざることなく、目に觸る

ふけばむげにちり
ゆくならひあり。
照る日の影も、雲
たてば、光をかく
す例あり。
○壁あちて、骨を
あらはし、柱は、
くちて皮をととめ
ず。
○淵ふかければ、
魚よく遊び、山長
ければ、獸よくそ

しものは、言葉に載せざることなんあらざりける。
これを見て、高きも、みじかきも、めてたふとまざ
るものなし。又、ことこのみの人は、その名を君に
知られては、身の面おこしとおもひて、世にもほこ
り、君のいと歌もえては、價なき資にもかへじとい
ひてぞ、深くよろこびける。さるを、今、こがねの
聲、たちまちやみて、玉のひびき、再び、きこえず
なりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大かたの
人の憂ともいひつべし。これをいかてか惜まざらん。

だつは、天の随々たる道理とやいはまし。

○三吉野の春の花 武蔵野の秋の月。

○翠緑をしたいらせる松は、血潮に染みし紅葉と、もに、深山をかざりぬ。

○雪は、真白にして、水は、緑を浮

かゝるを誰かは、慕はざらん。あはれかなしきかも、わが、斯く言ひあげするを泉の下にもさやかにさこしめし、天かけりても、はるかに、見そなはせとなんまをす。

○學校生徒の卒業を祝ふ

一日もはなるまさき父母のもとを、はるかにわかれきて、五とせ六とせの間、都にありて、もの學びするは、おぼろげの志ならかや。さるは、父母のふかきめぐみに、こゝらの寶をついやして、いそしみつと

○曳々として雲のごとく皎々として雪のごとし。

○海に月なければ、其の觀を盡すこと能はず月に海なければ亦其の觀をつくすに足らざるものゝ如し。

○世俗の樂は心をまよはし、身をそこない、人をくる

めて、この學校の業ををへぬるは、半ばその志をなしつといふべし。他人なる我れだに、いとうれしきを、本つ國にある父母らは、いかによろこびつらん。さて、今よりまた、専門の校に入りて、三年四とせの年月をすごして、まことに業ををへんとする、ますらその健男の友よ、いそしめや、つとめよや。さても、世にまなぶべき道は、あまたあれども、その要を得ずば、かひなかるべし。いでや、神ながらの大道は、君臣の義をいと重しとし、父子の親みは

しむ。君子の樂は
まよひなくして、
心をやしなふ。外
物をもていはど、
月花をめで、風を
吟じ、鳥をうらや
む類、其のたのし
み淡ければ、終日
樂めども、身にわ
さはひなく、人の
とがめ神のいさむ
るわざにあらず。

これにつぐものとす。このつの道をさとらざると
きは、たとひ千萬卷の書をよむも益なし。あやしく
妙なる藝術をまなぶも、いたづらわざなり。然るに
今の世の人は、西洋の書をむねとよむからに、君臣
のあいだに正しからぬ國ぶりに目なれて、天つ神
の正統におはします、我が天皇をも、あだし國の王
と、ひとしなみにおもひとり、又、彼の國の教にな
づみて、父子の道の尊きことをも打ちわすれて、た
ゞ夫婦の外に、重んずべき道なしとやうにおもへる

○玉の臺、金の殿、
軒をならべ、甕を
つらねたるよそほ
へるありさま、す
べて、この世の類
にあらず。
○諸行無常の春の
花は、是生滅法の
風にさそはれ、生
滅々己の秋の月は
寂滅爲樂、雲にか
くれ、儼も、此の

もありもしかゝる邪なる道にふみまどひて、我が
直く正しき風をわすれたらんには、なか／＼に、學
ばざる人におとるべく、はた、人をあやかり、世を
そこなふに至るべし。我が國は、神代より東の海中
にはなれたちて、君臣のことわり正しく、おやこの
したしみは、いやふかくして、他國人よりけ、君子
の國、禮義の國といはれつるに、たま／＼天下の大
政、いにしへさまにかへりて、今はことさらに、大
御稜威を千萬國に示すべき時なるを、世の人、心う

世にとどまらず。
 ○世をほめ、時をそしり、風雲につけて志をのぶ。悦に逢ひ、憂に向ふ。花鳥をもてあそびて、思ひをうごかす。事は、曲にして、旨ふかし、まことに人の心を正しつべし。
 ○春は、むかつを

けてしどけなく、氣力なへて、つたなからんには、國人のおもてふせのみかは、國家の耻辱ともなりぬべし。されば、ますらをの健男の伴よ。今より何わざを學ぶとも、いかなる藝を習ふとも、この二つの道をいたゞきもちて、いきのかぎり、わすれずば、はふらさず、あはれ、豊さかのぼる朝日の影に、櫻の花の匂ふがごときみやび心をもちながら、から人の、神とおちかしこむ、虎をも手どりにたるばかりなる、やまと魂をふりおこせかし。さて、他し國人

の花の香を、居ながら袖にしめ、夏は、水際清き池の蓮葉を、舟ならずして手折り、秋は、月にうそぶき、冬は、雪にうたふも、すべて、山水の憐れを添へざるなんあらざりけり。
 ○夏の日は、埋火の暖なるを思はず、

をして、我が天空を、世界にならびなき親國とたへたてまつらしめんこと、豈に、かたからめや。今日の卒業式のついでに、あらましごとを一言申すに
 なん。

○觀世太夫の話

觀世太夫が、木賊刈の能を、一人の農夫わりて、衆人の中にうちまじりて見しが、木賊刈の手かまへを見て、觀世太夫は、未だ木賊刈ることをしらずとつぶやきぬ。それを觀世きゝつたへて、その農夫に、

冬の夜に、ひみづの涼しさをば忘れつべし。

○兩虎、山谷に肉を争ひ、毒龍、深淵に珠を挑むも、斯くやあらんと思はるゝ。

○前を望めば、漫々たる海洋にして、白帆の點々たるあり。後を見れば、

いかなることかと尋ねれば、農夫いふ、さればとよ、木賊を刈るは、鎌を逆手ににぎりて刈るなり、草などを刈るがごとくにしては、かれぬものなりと答へけり。それより、觀世は、鎌を逆手ににぎりけりとなり。技藝といへども名家となるものは、衆のそしりを入れて、その藝をみがくことなり。

○無常の歌

はるのはな 咲きてちらずや 秋の月
みちてかけずや さくほどの 何かのどけき
みつるまの なにかひさしき かくしこそ

高山重嶺常に雲霧を鎖す。

○左は、断崖絶壁にして攀づべくもあらず、右は雲間に聳峙せる大嶺にして、是れ亦登りがたし。

○春の朝の花曇りは、秋の夕の時雨と同じくして、遊人なして、惱まし

ありけるものを うつせみの 世の人ごとくに
ねがふらん ころやいかに ひらさきの
名高の浦に よるなみの おとにきこえて
いかるがや せみの小川の ながれつゝ
萬のこがね ちの玉 のみてをさめん
くらなしの 濱のまきどの かずしらて
よきたぐひには なのめなる ことだにそけず
くれなゐの にほへるかほは ものほはな
さかりをゆづり くるかみは 雲にたなびき
まよひきは 霞のうちには 山の はを
おもいよそへて ますかゝみ あかねかたなく
みてもなほ 見まくほしきを あすか川

むるものところを謂ふべけれ。
○岸の汀には、白鷺の佇めるあり、山の麓には花の盛り咲き匂へるなど、書のごとき好風景ぞかし。
○海には、白き帆の風に孕んで走れるあり、陸には、雁の高く、山をか

ふちせかはらじすゑの松波をもこえじと
さきたけのふしをあはせてちぎりつゝ
こまのわたりには作るてふ瓜のかつらの
すゑとほくはひひろごりてあしびきの
山にある虎雲にのる龍のいきほひ
いかづちのよもをひかしく風も
はげしくなりてしげ山のおくさつくし
まきはしらふとしくたつるとのうち
にぬりゑがきてからにしきたるゝとばりは
はるよりも冬あたゝかに白玉を
ぬけるすだれは秋よりも夏すゝしくて
めもはるの庭のおもにはやまつみの

すめて飛べるなど、書にも見まほしき心地ぞする。
○日やうやく西に没すれば、月は、はや東の山の端に出でぬ。

しらぬ山をしわたつみのしらぬうみをし
水底にうとすましめ林に
鳥をすましめあしたには朝のあそび
ゆふべにはゆふべのあそび長き夜は
なかしてともすともし火をひかけにつきて
ふくれどもふくるもしらず秋の野の
藤ばかまよりはる山のうめよりまさる
たきもの香にしみかへる白妙の
袖うちふれば降雪の風にめぐりて
うたかたのたつるこゑには大空の
くもゝたゞよひちりもちり水なきことの
したひにもながるゝおとしことぢには

△序詞

○いよ／＼、穩かなる御世に、うまれあふみの水絶へざらんほどは、國家のさかえ、替るこそ得あらましきにこそ。

むせぶおとして 響は ふるすにあるを
ふえの音に それもさへづり もろ 共に
悉ひをすゝめて くみかはす 玉のさかづき
かぎりあれば ねふりの森の 下やすく(中略)
しきるもしらず 日たけても なほおきがたみ
かくしつゝ、 いつともわかず をだまきの
めぐるがごとく わがおもふ まに／＼ならば
たのしびは なにかはこれに すきの野の
過ぎじと思へど 春の 花 咲てちらずや
秋の 月 みちてかけずや 山 水の
流れてはやく あづさ 弓 さかさまにいぬ
としの矢の 人をもわかず すぎゆくは

○櫻花ゆめか、うつしか、白雲のおえてつれなき峰の春風。
○夢よりも、はかなき世の中を歎きわびつつ明し暮すほどにはかなくて卯月十餘日にもなりぬれば。
○花のかたち、いたづらにしほれ

ひまゆくこまの 追ひがたく ひつじのあゆみ
近づききて 身を若さじと たのむまに
後瀬の山の いたゞきに 雪ふりつもり
いつしかに おいその森の 老いはてし
みぬめのうらの よはの 月 すむもかひなく
みゝなしの やまほとゝぎす なつかしき
こゑもきこえず こまの 關 手さへさはりて
足がらの 山の名さへぞ ねたましき
さてだにいかで いさきの 松 いきてし有ばと
おもへども よみちのつかひ たしかにて
ゆるさぬ門の ふせぎにも さはるともなく
入來つゝ、 おきその風に出入りの

料資の文美 (六七一)

て、鳥羽玉の黒髪
白くなりけり。
○まなく降る時雨
に色やつく山は、
しげき梢も紅葉し
にけり。
○今をはじめの旅
衣、日もゆくすゑ
ぞ久しき。
○これは吳竹の世
に珍らかなる事な
れば。

河瀬にさはぐ 水鳥の
いざなひて 時の間をだに
いかにとまらん おほくらの
寶も て かへんとすれど
かるの市路に いなみ野の
つるかめに つけていはひし
ことのみよくて しての山
越えぬべき 道をふみかへ
わかるゝときに わたり川
わが袖は 人なきぬらし
人のたもとは わかれゆく
諸ともにとりこほり
たのいそぎに
かさゝれば
山とし高き
いのちより
いなとしいへば
折々の
千とせの坂を
かどですと
水上しるく
とまれる
わがなきぬらし
久かたの

(七七一) 門 事 人

○つれづれなるま
ゝに日くらし、す
むりに對ひて心に
うつり行よしなし
事を、そこはかと
なく、かきつくれ
ば、あやしうこそ、
物狂ほしけれ。
○稻舟のいなども
いひはて難く。
○行く川のながれ
は、絶えずして、

空にあふぎて あらがねの
かなしめめど くいのかひなく
ほのほをさまり 行水の
たゞひとり くるまやはなき
おくらずのせず 雁がねの
ゆくがごと 行くたましひぞ
たまなきあどの か 衣
ふたゝびも みえずしなれば
つかにをさめて 松がえの
うつしうゑ 年月ふれば
枝に鳥なき 苦むせの
かくれける ふりにし宮は
野となりて
土にふしつゝ
燈火の
ながれをたえて
うまやなき
つらにおくれて
あはれなる
あかねども
はかなきしるし
なびきたる
陰につきねぞ
野となりて

しかも本の水にあらず、よどみにうかぶ、うたかたははかつ消えかつ結びて、ひさしくとゞまることなし。
○としくくの春の草にも、なぐさまで、枯れたる人の跡を戀つゝ。
○夫れ花の種は、地に埋もれて千林

の梢に上り月の影は、天にかいつて萬水の底に沈む、是等をば、皆何れか順と見、逆なりと謂はん。
○春さめの、ふるゝのみちの、つばすみれつみても行かん、袖はぬるとも。
○梅の花笠、春も

人さへすまざなりゆけばおいざりし草
おひしげりちりさへつみてみがきつる
玉のひかりは露ふかみ今ぞもすそも
かゝぐべく風におふる松がえに
かたぶきまさる軒端よりつたはひかゝり
もみぢして秋のあはれはきはほりぬ
あさぢが原の櫻花春をわすれず
咲きぬれど雨にぬれつゝ風にちり
見る人もなくなりにけりこれをおもへば
あさがほのあしたのさかりいなづまの
よひのほのめきかげるふのありてなければ
なにをかはうらやみはてん夏草を

とがまにふれてかるほどもこゝろなとめそ
ひたぶるにのりのみかどのはじめなく
をはりもしらずゆをびかにすめるこゝろの
みやこにぞ道をたづねてとくいたるべき

反歌

世のちりのばかなきことをなげきてぞ

つねなるみちもしるべかりける

白雲にはねうちかはしとぶ雁の

敷さへみゆるあきの夜の月

第五編 人倫門

○ 臣子